

む つ み 園

一 般 養 護



(母子像・河合愛一作)

焼跡に人影無し

大 下 博 美（八十三才）

被爆地…入市

当時の急性症状…なし

家族の死亡…実姉

現 症…高血圧、糖尿病

生 い た ち

安佐郡戸山村字丹原（現在沼田町）にて父円平、母セキの長男に生れ姉二人、弟一人家族五人。戸山尋常高等小学校卒業後、農業、山仕事に従事し、大正十三年五月知人の紹介に依り、朝鮮咸鏡北道羅南（第十九師団司令部所在地）陸軍衛戍病院に軍属として勤務。昭和六年九月朝鮮陸軍倉庫羅南支庫（後糧秣支廠）獣医材料科に転勤。昭和十八年十一月に、広島市西寺町に引揚げ、昭和十九年十一月山県郡安野村坪野（現加計町）に疎開し、十二月日本発送電株式会社（現中国電力株式会社）に入社す。

あれは何だろう

二十年八月六日午前八時頃、同僚と屋外作業をしておりますと、誰れかが、あれは何んだろうというので東の方向を見ると、キノコを大きくした様な雲が見えました。雷光いなづまがした様だったと言う者もあり、この天氣に雷なんてと話しながら作業を続け十一時頃でしたが、又あれは何だろうと見ると、白い紙切があちらこちらに飛んで居るので拾って見る。何か書かれた焼け残りや焦げて黒くなったのもあり、下しもの方で火事でもあったのではと話し合いました。

夕方になって、広島市全部焼けて、生きている人より死んだ人の方が多いた事で、広島には同郷の人も数人あり、又姉の家族も西寺町別院前に居りますので、翌七日早朝自転車（約三十キロ）出て十一時頃横川橋迄着きました。見るとまったく焼野原で、川にはイカダの上に男女の見分けもつかないほど黒くなって死んで居られました。別院跡を目当に、姉の家の焼跡にも人影も無く案じながら持参のオニギリを喰べ、鷹匠町の同郷の人を尋ねました。が見当らず、それより比治山下に特にお世話になって居る方を尋ねて参りました。幸い焼けた家屋はありません。殆んど破壊されました。一人のおばさんに出会いましたので河野さん宅を尋ねますと、この附近の人は殆んど比治山の東側方へ避難された様ですとの事でした

が、時間もなく帰りを急ぎました。途中あちこち煙りが見え、そこで死亡した方を運んで火葬されて居られました。帰宅したのは夜十一時頃でした。

翌八日早朝、又出かけ十二時頃寺町に着きました。幸い長男・博と出会う事が出来ました。話によると、父は観音町三菱造船、長男・博は東洋工業に出勤中で、姉は空襲警報発令中だったので近所の奥さんと別院正門のかげに居ったとの事、夕方漸やく打越町の元住んで居た所で三人と出会う事が出来ました。（打越町は万一の場合の避難場所として話し合ってた居所）。しかし患者も多く狭いので、翌八日朝安佐郡安村字安の親類の家（八・五キロ）に荷車で親子で運んで、今帰ったとの事で様子も解った訳です。

以後私は姉の居る安へ帰りました。夫婦は会う事も出来ましたが、ほんとうに見られた姿ではありませんでした。治療の方法もなく、只水とおもゆで看護するだけです。十日後十九日四十九才で死去致しましたが、会葬などする事も出来ず、親子二人で火葬を済ましたとの事、私等の知ったのも三・四日後でした。

被爆後の生活

昭和三十三年中国電力退職後、加計町香草に居住し、安佐郡安古市町有馬製材所に務め、四十九年三月妻死亡後、植林及び手入等に依り独身生活。五十九年一月当養護ホームに入所

を認められ、お蔭さまで不自由のない生活を送り、たゞ／＼有難く感謝して居ります。

被爆体験

岩 本

滋（六十七才）

被爆地：広島市山口町

当時の急性症状：下痢・発熱

現 症：糖尿病・腰痛

生 いたち

広島県竹原市竹原町で七人兄弟の三女として生まれ、地元の学校を卒業して、大阪市の親類の知人宅で裁縫の見習のため住込みましたが、途中で目が悪くなり故郷に帰りました。しばらくして又広島市の叔母の所に身をよせ、或る家具店に務めるようになりました。そこで主人と知合い結婚をして二人の子供が生まれました。

被爆

戦局が激しくなり、私と子供は広島県の志和町の親類の家に一旦疎開しましたが、長男が中耳炎になり、広島病院に通って居りました。丁度八月五日に来て家に帰り、一晚したら病院に行くつもりで居りました。朝起きて台所で仕度をしている時、ピカッと光ってその場に倒れて気を失いました。気が付いた時は家の下敷になって居り、漸くして抜け出すことが出来ました。主人と二人で子供を助け出し、少し歩いて行って振り返って見ると家が燃えて居りました。やっとの思いで温品の親類に行き一晚厄介になり、手当てを受け、たどりとどり歩いて志和町の家に戻る事が出来ました。

被爆後の生活

軽い火傷、下痢、脱毛も皆さんのおかげですっかり治りました。私は当時子供が出来て居り、十二月三十一日に出産しましたが二十日程で死亡しました。長女も消化不良になりもう少しで命をおとすところでしたが、どうにか助かりました。主人が一足先に広島市皆実町の方に住家を見つけたので、半年後に子供を連れて主人の所に帰りました。二、三年後に段原の方に乾物店を出して生活が出来るようになりました。その後事情があり、私が五十才

の時夫と離婚致しました。

今年の四月頃糖尿病になり、病院に一カ月入院しておりました。夏の間体がだるく気力もなくなり、物事にも集中出来なくなりました。ホームに入所させていただき何か元氣が出て来ました。ホームに入れて頂いて皆様に大変御世話になって居り有り難う御座います。

朝食中被爆

松村 寿 栄（八十一才）

被爆地…広島市段原日の出町

当時の急性症状…なし

家族の死亡…なし

現 症…高血圧・腰痛症・慢性胃炎・虚血性心疾患・頭痛

長崎市東中町で父奥村勇太郎、母タツとの間に一人娘として出生。長崎市の附属小学校卒業後、ミッシヨンスクールを四年生になって中退する。一人娘のため気儘に育ち、琴、筑前

琵琶等いろいろ習い事を致しました。二十才の時、広島から長崎へ勉強に来ていた松村英三氏と結婚しました。三男一女を出産、長男は奥村家を継ぐため里子に出しました。

段原日の出町の借家で、家族四人で朝食中被爆する。建物は破壊したが幸いな事に家族の負傷はなく、全員無事でした。

夫は税理士で金屋町に事務所を設けていましたが、昭和四十三年病死しました。子供は皆んな片付いたので、岡山に長男が居住しているため、荷物を整理し長男の所へ行き二年間一緒に暮していましたが、折合が悪く、又広島に帰りました。広島で次男と暫らく同居しましたが、病身のため入退院を繰り返しました。

昭和四十年頃転び腰や膝を打ち、それ以来両膝関節が悪くなり、寒い日には特に痛みが激しくなります。

昭和五十六年八月四日に皆実町の真田病院を退院するとすぐホームへ入所させていただき、ました。年に一度、東京に住んでいる娘の家へ泊まりに行くことが一番の楽しみです。

動転・余裕なし

藤 井 綾 子（八十四才）

被爆地…広島市吉島西二丁目

当時の急性症状…頭痛、胃腸が悪くなる

家族の死亡…なし

現 症…甲状腺・動脈硬化症・気管支炎・変形性背椎症・機能低下・腸機能不全

福山市天神町に於て父猪原態太郎、母タケの次女として出生。兄一人姉一人あり。父の職業柄転勤が多く、兄姉の出生場所が皆違ふ。小学校卒業後は家事の手伝いをする。十九才の時藤井一次と結婚、女子出産するも生後五十日位で病死する。その後は子供に恵まれない。

吉島町（刑務所の北側）の自宅の中庭で被爆する。頭から全身に灰が降りかかる。座敷へとんで入ると、電気の線が切れたり、窓ガラスが壊れていた。気が動転して大切な物は持たず、主人と二人のネマキ二枚を持って出るのが精一杯だった。近所の人と吉島の飛行場へ逃げた。夕方我が家に帰る途中、火傷をした人達が助けて下さいと叫ぶのを聞いても、自分の

事で一生懸命でそんな余裕はありませんでした。家に帰って見ると我が家は全焼していました。夫婦共体には怪我はなかったが、当分下痢が続き、頭髮も抜けました。

吉島町の家が全焼した跡へバラックを建て、そこで当分生活する。主人は色々な仕事をしていたが、昭和二十七年五十八才で死亡する。

昭和三十五年頃から腰痛のため記念病院に入院、退院するも間もなく再発。原爆病院に一年間入院する。当時は甲状腺が腫れていると言われる。退院後は宇品町の知人・松岡氏宅に間借りをし、同家の手伝いをしていたが、昭和四十七年県病院で腸閉塞の手術を受ける。術後は高令のため働けなくなり、居辛くなり、将来の不安もあって原爆ホームに入所を希望した。

夫の遺体は見つかりません

久保節子（七十才）

被爆地：広島市松原町猿猴橋東詰

当時の急性症状：毛髪脱落・背中負傷・悪性下痢

家族の死亡：父・夫

現 症：虚血性心臓病・変形性背椎症

生 い た ち

母の実家、佐伯郡大柿町字小古江にて父久保善作、母マサヨとの間二男七女の四女として生まれる。父は僧侶を嫌い軍医となり、弟に寺を譲りました。弟夫婦に子供がなかったので姪の私を育て、お寺の跡取りにしました。十九才迄京都市南区西九条比永城町一大通寺に住し、僧侶の従兄と結婚し、長男・国男を出産しましたが事情があり離婚しました。その後実家に帰り、昭和九年四月津田幸三と再婚しました。

被爆・下痢が続く

妊娠四カ月頃、京都へ行く為駅へ向う途中、猿猴橋の上で被爆しました。爆風で橋のたもととの呉服店の店内に飛ばされ、反物の下敷きになり、背中や腰をひどく打ちました。被爆時は背中に負傷し毛髪脱落、消化器障害の為下痢が続き苦しみました。夫は自転車で途中まで送ってくれ、自宅へ引き返す途中被爆したので遺体は見つかりませんでした。当時平塚町に住んでいた父と、大阪から疎開していた姉と子供四人が被爆死しました。

被爆後の生活

大洲四丁目在住。妹の嫁ぎ先に移り、被爆死した姉の子で疎開していた三人と長男国男と妹の家族と九人で生活しました。駅前にて飲食店を経営して妹の夫の復員を待ちました。大洲の妹宅で次男幸男を出産しました。幸男は身体に紫色の斑点があり頭髮がなかったため、医師から育たないだろうと言われ入籍が遅れました。その後妹と平塚町で旅館を始め、子供達も成長したが、心臓弁膜症にかかったため妹宅を出て一人暮らししました。その後、生花、茶道の教授、仕立物等により生活をしました。次男が白血症で倒れた時、お大師様に願をかけ大根、抹茶を断ちました。そのお陰で次男は良くなり、結婚し一男一女の父親になりました。

早くホームに馴れたい

昭和五十七年二月銀山町の横断歩道を渡っている時タクシーにとばされ左助骨三本、左膝骨折の怪我をし、四カ月意識不明となりました。土本整形外科にて二年間療養後、五十八年十一月交通事故後遺症で原爆病院へ入院しました。両下肢、指外向のため手術し、五十九年七月迄入院しました。退院後別府の原爆センターで静養していました。八月二十八日に広島へ帰り、翠町の藤原菊江宅に身を寄せてホーム入所を待ち、十一月十九日に入所しました。

早くホームの生活に馴れ、皆さんと一諸にクラブに入って楽しみたいと思っています。今は毎朝食後に般若心経を写経し心が安らいでおります。

死 体 の 山

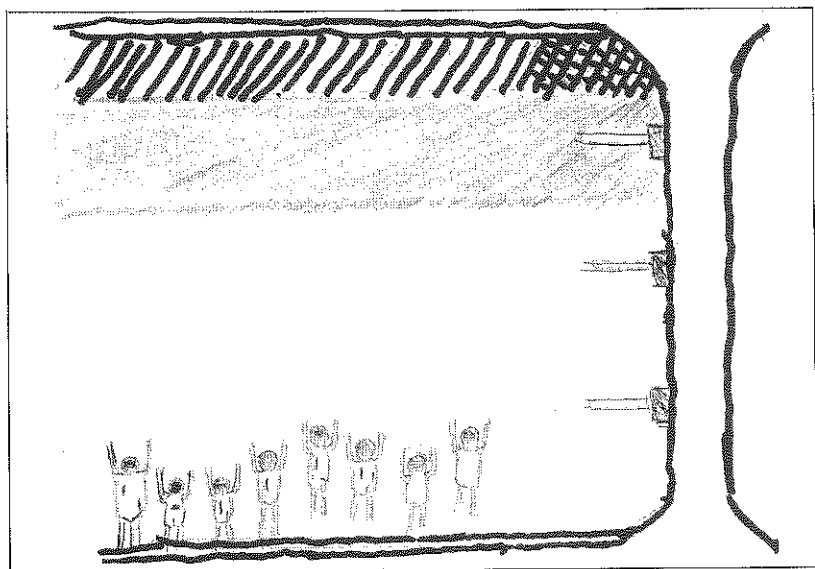
中 村 計 秋（六十六才）

被爆地…宇品駅列車内、爆心地より四・五km、負傷なし

現 症…腎性糖尿・胃潰瘍・萎縮性胃炎

生 い た ち

私は父憲一、母アヤノとの間に十人兄妹の二男として山口県宇部市で出生。間もなく広島市楠木町四丁目三十四番地に帰り成長しました。長女は、私が一年生の時死亡。二女は五日市に居住し、三女（被爆者）は広瀬北町丸橋家に嫁ぎ健在です。四女（被爆者）は三滝本町・梶岡家に嫁し健在です。五女（被爆者）は宇部市居住。長男はビルマ戦で戦死。三男、四男はフィリピン戦で戦死。父は昭和十五年八月四日死亡。五男十六年五月死亡。



(画・中村計秋)

私は昭和八年三篠高等小学校卒業後屋根葺に弟子入。昭和十二年頃より戦争が激しくなり仕事がありませんので、軍関係の工場で千田町にある小林製材に入り、弾薬箱や缶詰箱の製造に従事しました。昭和十四年一月十日現役兵で歩兵十一連隊に入営し、同年四月二十四日、宇品を出航。現在の中国上海港に四月二十六日上陸、独立歩兵十一旅団第一中隊に編成されました。同十七年二月鹿児島西部十八部隊に転出。同十八年五月三十日鹿児島西部十八部隊留守部隊に於て除隊になりました。十八年六月十日旧陸軍糧秣支廠入廠

被爆時の状況

八月六日私は、宿直で糧秣支廠で勤務して居りました。六時か、七時か忘れましたが空

襲警報が発令されましたので、それぞれ持場に警備につきましたが、間もなく解除になり自分自分の職場に帰りました。私は、前日の命令で、賀茂郡河内町の水龍酒造に発注した清酒の検査に行く為の「森末」雇員と一緒に宇品駅に出て列車に乗り待ち合わせていました。

その時、北の方向が光ると同時に「ドカン」と爆音がし、窓硝子が割れ頭に降りかかりましたが、幸に二人共怪我はありませんでした。頭をあげて見ますと、皆実町の方に雲が上がつていました。これは瓦斯のタンクが爆発したのではないのかと二人で話し合いました。

空襲警報は解除になっていましたし、其の内列車は動かないと放送があり支廠に帰りました。途中家屋がいたんでいるので、相当ひどくこたえたものと思いながら支廠に着いて二度びっくり。煉瓦の倉庫の鉄の扉は飛び、木造倉庫は半壊していました。当時人といえば軍人（主計・技術者）、職員、工員さんで佐賀県鳥栖に、また一部は賀茂郡西条賀茂鶴酒造に疎開して居りました。当時本廠は、己斐国民小学校にありました。宇品では怪我人は十人ばかりいたでしょうか。この人達の応急救置をすませました。

私は糧秣支廠に務めだしてから吉島羽衣町義兄宅より通っておりしました。姉達は田舎に疎開して居りましたが、義兄は広島にいたので心配して、御幸通り御幸橋を渡り電鉄前より南大橋を渡り、羽衣町と歩きました。義兄宅はすでに焼失して居ましたが、立看板に無事豊田郡大草村に帰ると書いてあり、妹達も楠木町にいる事がわかり安心しました。水主町（加古）

旧県庁、県病院、材木町、新橋、此の間建物疎開の爲大人や、中学生が勤労働員された人達でした。衣類は焼けはげ、皮膚はむけたれさがり、因幡の白うさぎさながらの姿で、息のある方は、水を求めて干潮の川へ降り水の或るところ迄で行くこともならず息絶えておられました。

丘から川は、死体の山でした。西方の町より小網町、十日市町にかけては軍人や軍馬の死体でした。この時間は当番兵が将校を迎えにいつて、兵営に帰る途中でした。電車通り北に進み、横川駅付近では軌道上に電車の焼けたものが三台ありました。楠木三丁目、四丁目、自宅は焼けて居りましたが、妹達のかすり傷はしてましたが無事に大芝公園に避難してましたので安心しました。来た道を通り十日市、左官町、相生橋（左に護国神社現在市民球場、右に原爆ドーム）電車通り電柱に、アメリカ兵が、縛られて死んでいました。紙屋町から宇品へ帰る途中、所々死体は見かけましたが、材木町から十日市町にかけて程はありませんでした。

六日以後、家は焼失し帰る家も有りませんので、糧秣廠に泊まり負傷者、死亡者の火葬また、役所業務本部との連絡（己斐国民小学校は被爆者治療所になりました。八木国民小学校に移っていました）にあたりました。十五日の終戦は八木国民小学校で聞きそれ以後、毎日残務整理。八月二十四日糧秣支廠解散。私は、義兄姉、豊田郡大草村福田に移り世話になり

ました。

被爆後の生活

義兄の処で農業の手伝をして、二十一年三月頃までおりました。其の間、二十年十月父の旧本籍地より家内をもらいました。四月に入ってから楠木町四丁目バラックを建て住み、空地を耕し馬铃薯、南京を作り又、進駐軍の放出版物資のトーモロコシ粉などで団子を作りました。米は義兄、家内の里から援助してくれました。大根飯、芋でどうやら過ごしました。

務めは、日本通運に糧秣支廠関係の知人のお世話で入り、其の後郵便局にお世話して下さる方があり試験を受けましたところ採用になり、字品郵便局保険課に勤務しました。二十七年まで務めました。子供も三人になり給料が安いので生活できず、その頃から家もぼつぼつ建ちはじめたので、以前の仕事にかえるため局を退職しました。五十二年迄屋根葺をし、此の年に、屋根から落下しやめました。二十六年十二月二男死亡。三十三年八月長男死亡。現在長女一人、結婚してはいますが、身体障害者で、私が世話になるわけにいかず、体調も思わしくなく原対課に御願して入所さして載きました。

昭和五十九年三月十五日から御世話になっています。寮母さんも良くして下さるし、入所者も、良い人ばかりで毎日／＼楽しく生活して居ります。

妻と赤子の骨を抱いて

河 合 愛 一（七十二才）

被爆地：加古町トラックの中

家族の死亡：妻と赤ん坊

当時の急性症状：なし

現 症：脳動脈硬化・高血圧・慢性肺気腫・慢性肝炎

生 い た ち

私は、岡山県で父河合峯太郎、母久与との間の二男一女の次男として生まれました。私は双生児で兄は敬一と名付けられましたが生後間もなく死んだそうです。校長先生が、敬愛という言葉から名付けてくれたそうです。

私が、三才の時両親が離婚して、六才の時に広島へ移って来て、大手町小学校に入学しました。八才の時に父が再婚しました。異母弟妹が次々と六人生まれ家庭が面白くないので、松本商業を一年で中退し大阪へ行き働きました。昭和七年から昭和十四年十月迄軍隊におり

支那事変、満州事変に参加しました。昭和十二年七月に、出征する私を見送りに神戸から来た姉フミ子が病気で死にました。

除隊後、神戸の三菱造船に勤め、昭和十四年十二月二十三日にイツ子と結婚し、昭和十六年十月十五日に長男・克己が生まれました。

妻 無 惨

私は日通のトラックの運転手をしており三十二才でした。妻は二十七才、長男四才で西白島に住んでいました。

八月六日は加古町を運転中で、トラックの中で被爆しました。身体が前にのめり、トラックの窓ガラスで後頭部に軽い怪我をしましたが、その後身体に異常はありませんでした。宇品の方から消防自動車が走ってくるのが見えましたが、気づくと道路にひっくり返ってしまいました。馬車や自動車もひっくり返っているのです。これは普通の爆弾ではないと思いました。新庄橋附近で「河合はおらんか！」と叫びながら妻と息子を探して歩きました。どこをどう歩いたのか夢中でしたが、常盤橋の下で三人の女子学生が「おじさん！水を下さい！」と手をさしのべていたのですが、どうする事も出来なかった事が今でも心に残っており、どうかして水を飲ませてやりたかったと思っています。

家族の避難先が妻の姉宅の祇園町山本だったので探しに行きました。産婆さんの家の前に座って四才の長男が焼いたじゃが芋を持って、うたたねをしている姿を見つけた時は、本当に嬉しかったです。『お母ちゃんは何？』と聞くと息子は後ろに横になっていて人を指さしました。見ると妻は火傷で顔がまん丸くなって目がつぶれたようになり、無残な姿になっていました。八カ月の身重でした。知人がナタネ油を一升持っているから半分上げよう、人骨を砕いて油とまぜ火傷に塗るとよく効くから奥さんに塗って上げなさいと油をくれました。私は焼跡から人骨を拾って来て石で一心に砕きました。人骨というものは仲々砕けないものだと思います。それを妻の火傷に塗ってやると、表面がカサカサに乾いて真黒くなりました。少しづつはがしてやると、あれほどふくれていた顔が元のような大きさになり、目が見えるようになりました。これで元氣を取り戻せるととても喜びました。味噌汁を作って食べさせると、どんな物でも美味しいと言う妻だったのに「お父ちゃんおいしゅうない……」と言ったので、もう長く生きないだろう……と思いました。

死んでしまいたい

八月二十三日に早産して、妻も赤ん坊も死にました。私は息子と一緒に妻と赤ん坊の遺体を焼きました。妻と赤ん坊の骨を抱いて、熱が出た息子を背負って汽車に乗り岡山の親類

を頼って行きました。笠岡より軽便鉄道で入り、一日に一便しかバスが通らない所なので、道のないような山を歩きました。やつとたどり着いたら、警察からガスを吸った人を家の中に入れてはいけないと通達があったと言われ門前払いでした。途方にくれてしまい死んでしまいたい気持ちになって近くの山へ登りました。頂上に着いた時はすっかり陽が暮れていました。その時ふもとに一軒の灯が見えました。灯に誘われるように山を下りてその家を訪ねました。小さな宿屋でした。主人に事情を話すと暖かく迎え入れてくれ、離れの部屋で妻の遺骨にお線香を上げてくれました。息子はミルクとリングをもらいました。あの時の嬉しさは忘れる事が出来ません。息子に、お父さんはお礼をする事が出来ないかもしれないけれど、かならず御恩を忘れないようにといいきかせておりました。後年息子はお礼に訪ねて行ったそうです。笠岡の錦潟旅館ニシキガタといひます。

息子とともに

広島へ帰り大手町八丁目に小屋を作り、配給の食物で細々と暮しました。再び運転手となり、息子を助手席に乗せて働きました。時には自暴自棄となってスピードを出すと、息子は小さい足でブレーキを踏んでくれたものです。住宅と食事付の病院の運転手となり、息子を可愛がってくれた看護婦の石田安子と二十一年十一月に再婚しました。妻は三十一年四月十

六日に結核で死にました。私はアキツ自動車で塗装工として働きました。

被爆して死んだ妻の供養のために仏像を彫りましたが、虫喰いの穴のようなものがあつたので、熱湯に入れて虫を殺そうと思ひ仏像を煮ました。ところがその仏像の首から肩にかけて、しみがはつきりと現われました。火傷して苦しんだ妻が血をふき出したところだったので、本当に不思議に思われてなりません。生活が荒^{ヌサ}んで随分酒も飲みましたので身体をこわし、息子には苦勞をかけました。

ホーム入所前後

息子夫婦と孫三人と同居しましたが、家が狭かつたし、私のわがままでいざこざがありました。五十八年一月七日発熱し、慢性肺氣腫のため吉島病院に入院しました。ホーム入所を希望して二月十七日に退院と同時に入所しました。好きな絵を描いたり、皆で公園散歩をしたり、とても穏やかな楽しい日々でした。

息子が家を新築し一緒に暮そうと私の部屋を作ってくれて、嫁や孫が迎えに来てくれましたので、五十八年十二月二十八日に退所して家へ帰りました。ところが息子夫婦は仕事で忙しく、一人自分の部屋にいると話相手もなく、淋しくてつい酒を飲んで過^スぐ事が多くなりました。息子夫婦は、とてもがっかりしたようですが、私はホームで過^スした十カ月の生活

が忘れられず、援護課にお願いして、五十九年二月十七日に念願が叶い再入所させていただきました。

私はいつもゼイゼイして胸が苦しい時が多いのですが、ホームの職員の方達が本当によくお世話下さいますし、設備が良く快適な毎日を過ごしています。又たくさんの入所者の方々とお話したり、器楽クラブ、カラオケクラブ、習字、手芸、張絵と楽しんでおられる姿をみて励みとなっています。私は絵を描くのが好きで、作品を食堂や廊下に額に入れて飾ってもらっています。ホームで明るく穏やかに生活している私の様子をみて、息子夫婦も大変安心し喜んでくれています。

青　白　い　光　線

戸　津　川　雅　人（七十五才）

被爆地…稲荷橋附近（○・九km）

当時の急性症状…右下腿打撲・擦過傷

家族の死亡…次男

現 症：脳動脈硬化症・冠不全・ウツ血性心不全

生 いた ち

私は島根県那賀郡三隅町字井野で父戸津川治佐市、母リヨとの間の五男二女の次男として出生しました。

私達家族は大正十二年、製材工場を営む伯父の戸津川卯三郎を頼り横川三丁目に出てそこで働きました。私はその時十六才で店員として働きました。大正十四年九月母が死亡。兄は私が六才の時死亡致しました。

昭和三年、従兄を頼り東京バス会社に入社し、翌年徴兵検査が近づきましたので広島へ帰りました。昭和五年運転免許をとり、トラックの運転手として就職しました。昭和十一年十月戸津川定子と結婚し、四男一女をもうけました。昭和十九年九月広島陸軍兵器廠に入廠し、自動車輸送部に命ぜられ奉公致しております。

被爆・家族のこと

学徒動員三名をトラックに乗せて出廠し、稻荷橋附近で被爆しました。トラックの運転席の窓ガラスが以前から三角に壊れていて、爆風がその透き間を通ったので、ガラス破片がシ

トに突き刺さっただけで怪我をせずすみしました。その時青白い光線を見た瞬間、目を閉じじっとしておりました。乗せていた学生さんは何処に行ったかどうなったか判りません。暫くして私は帰廠致しました。

街が一面火の海で直ぐ家に帰ることが出来ず、夕方五時頃帰宅しました。帰って見ると妻は破れたモンペをはき、子供を抱いて茫然と立っておりまして。娘の千恵子がいらない、探してくれと言うので探して歩きましたが見つかりませんでした。その晩は近所の防空壕に入り、家族四人が重なり合って寝ました。

妻は家の下敷になり、蚊帳の中に居るのに気付き、爆風で屋根に一米位の穴が開いていたので、蚊帳を破って真先に子供を外に連れ出しました。次男の勝利は台所の狭い所に居たのであろう、どうしても助け出すことが出来なかったと話しました。そうこうするうち家に火がつかしました。長男は頭を半分位火傷しました。帽子を前深く被っていたので、顔は火傷をせずにすみしました。娘は一週間後に、託児所の先生から新庄橋附近で見たと聞かされ半信半疑で妻と一緒に探しに行き見つけました。本当に嬉しゅうございました。娘は背中に石がとんで来て痛むと言うので、近所の救護所で当分マキキュロ液をつけてもらいましたがなかなか治りませんでした。

昭和二十四年頃、学校の先生が、お宅の子供さんは顔色が悪く、痩せておられるので一度

診察を受ける様にと言われ、校医さんに診て貰いました。助膜炎と言われ本当にびっくりしました。知人の紹介で水主町の同愛会病院に入院しましたが思わしくなく、市民病院に転院しました。その時すでに遅く、肺結核になっておりました。先生が申されますには、手術をすれば良くなる可能性はあるが、衰弱しているから様子を見ましょうとのことでした。そのうち病気は日増しに悪化し、昭和三十四年四月、最後の喀血で死亡しました。一人娘でしたので可愛くて残念でなりません。今でも思い出すと涙が出ます。

次に長男ですが、前に申しました通り、頭に火傷をしているので親戚から食料油を貰い塗ってやりました。それが良かったのかだんだん良くなり、今では一部ケロイドもありますが頭髮も生えました。

次男勝利は、被爆して三日後に台所を探しましたが、死体が半分白骨化していました。お腹の辺りが骨になっていなかったもので近所の合同火葬場で火葬してもらい、前の白骨と一緒に寺町の善正寺内の墓に葬りました。

被爆後の生活

三週間程、横川の近所の防空壕で家族と暮しましたが、その後は妻の実家で十二月迄生活し、横川へバラックを建て移り住みました。昭和二十一年一月から三菱造船所で働き、二十

四年十月から四十七年三月まで広島家庭裁判所で運転手として勤め、退職後は林業ビルの管理人となり五十八年辞めました。妻は四十九年肝硬変のため五十九才で死亡致しました。

ホーム入所前後

退職後は、遊んでいても体調が崩れるので、一カ月に十日位アルバイトで働いていましたが、今年心臓発作が起き仕事を辞めました。今考えてみますと昭和四十年頃、急に鼻血が出て、二カ月程祇園の永尾医院に入院したことがあり、原爆の後遺症だと思っています。病名は冠不全でした。

その後三男の世話になっていましたが、五十九年九月、ホームに入所させていただき、今は皆様に心より感謝致しております。

ホームで落ち着いた日々

松 本 一 之（八十九才）

被爆地……尾長町

当時の急性症状……なし

家族の死亡……なし

現 症……助膜脾脈・尿路感染症・急性気管支炎・気管支ゼンソク・上室性期外収縮・心不全

岡山県金光町で、父松本政造、母喜奴との間に、二男三女の長男として出生する。高小卒業後父と共に農業に励んだが、十八才の時、父と死別する。其の後岡山市、神戸市で各二年間、弁護士の手生として勉強したが試験に失敗した。其の後、内縁の妻愛子との仲に、子供三人儲けたが離婚した。子供は妻に渡した。

以来、岡山税務署に六カ月、長崎市民友新聞見習記者として一年等、色々と職を遍歴した。後、呉市に帰り日雇いをする。

尾長町に住み、自宅の一階で被爆した。当時は、山本組の人夫をしていた。家が破壊したので、同町の知人・高橋時子宅に避難した。そこで三日間を過ごし、自宅に戻り毎日救護活動をした。大本営のあった回りで多くの人の火葬をした。

土建業の日雇い、鉄工場の臨時雇い、廃品回収業等の仕事をしたが適当な職がない為、昭和四十二年十月、職業安定所の紹介で、福祉事務所と相談した結果、生活保護を受けた。その後過度の飲酒によって動脈硬化症になり、四十四年一月、矢野町・浅田病院に入院した。

昭和四十七年五月、喜生園に入所する。五十三年より、脳動脈硬化症、虚血性心疾患の為、草津病院、力田病院等入院退院をくり返す。

力田病院へ入院している時、新聞で原爆養護ホームの事を知り、喜生園へ退院した折話したらすぐ手続きをして呉れ、五十七年五月十日に当ホームに入所出来た。ここへ来てからは、舟入病院が側に有るので、毎日落ち着いた日々を送れ喜んでいる。今は弱い人の回りも掃除してあげれる程元気です。

今日一日が幸せ

沖野 サツキ（八十六才）

被爆地：市内江波湊町

当時の急性症状：ガラスの破片にて肩二ヶ所怪我

家族の死亡：なし

現 症：脳動脈硬化症・慢性胃炎・慢性肺気腫・貧血症・心不全・便秘症・肺センイ症

肝障害疑い・関節炎

生 いたち

山県郡戸河内字田ふきにて父沖野松兵、母カヤの四人姉妹の長女として生まれました。小学卒業後十二才で岡山に働きに出て、たしかその時給金が一年間で八十銭でした。あまりにも辛く、逃げる様にして水島の紡績工場に行きました。その時が十五才です。十九才迄ここに居ました。それから岡山の池田家岸本の昔の武家屋敷で、お手伝いとして奉公したのです。岡山県小田郡で主人と結ばれました。主人の兄弟が多く、二十一才で婿養子となってもら

いました。そして長男にめぐまれ幸せでした。ところが、主人の里、四国の讃岐で、こんな悲しいことがこの世にあるだろうかと思うことが起きたのです。女兒が生まれ十八日目に、長男（四才）が便所にはまり死なせてしまったのです。そして三日後、女の子もあの世に旅立ってしまいました。一年位讃岐で暮し、大阪に二十八才までいて、それから広島に帰り市内江波で生活をしました。実妹が亡くなる時の遺言で、妹の娘の子を育てました。もしかして、この子も死んだらと考え恐いなと思いましたが、おかげで、今家庭で幸せです。

被爆時の状況

クリーニングの外交、京染等色々なことをして生計を立てていました。近くの牧場の主人が召集され、奥さんが大変な仕事を一人でされていましたので、その手伝いをしてほしいと頼まれ手伝をしていました。

被爆の朝牧場へ行く途中、他家の軒先で爆風にやられ、飛ばされました。その時ガラスの破片が肩に二カ所つきささり出血しましたが、その時はあまり痛いという感じはありませんでした。とにかく家が気になり帰ってみて、びっくりしました。家がふっ飛んでいて全壊していました。主人も帰って来ましたが、怪我がないので安心しました。養女は支那に行っていました。

主人と一緒に射撃所へ逃げました。その途中、近所の人が日本刀を持って逃げるのに鞘が無くなり、抜き身となつたのをさげて逃げているのが今でも印象に残っています。射撃所で小屋がけして二晩宿まりました。怪我をされた親子二名、近所の家族三名、私達二名。次の日怪我をした娘さんが亡くなりました。どんな風に声をかけたか覚えておりません。女なのか、男なのか、わからなくなつて、苦しんで苦しんで死んでしまった。その時声のかけ様になかつたのかもしれない。

被爆後の生活

壊れた家を集め我が家の跡に小屋をつくり、六畳一間の生活をはじめました。わずかばかりの貯えがあり、百姓もしていたので、どうにか二人位は生き延びました。二十一年に支那より養女がかえり結婚しました。主人と婿と力を合わせて働き鮮魚店をやりました。四年位やりましたが、商売が思う様にいかず、婿は会社で勤めました。主人は細々と鮮魚店を続けました。三十七年に家も新築することが出来ましたが、四十年に主人が腸結核で他界。私は其の後鮮魚の行商を続け、七十一才まで働きました。

ホーム入所前後

長い間働きましたが脳卒中で倒れ、多少の貯えで生活していたが、高血圧のため通院する毎日。養女夫婦にも自分達の生活があり、迷惑をかけるものびなく、自分の生活を考へて市役所の人の話を聞き、自分の考へで入所を決めました。現在は本当にホームの皆さんに頼りきっています。養女もよくしてくれます。皆さんに感謝しております。今日一日、今日一日大きな御慈悲の中で生活させて戴いております。もし明日死のうとも今日一日が、私には幸せです。ありがとうございます。

人に言つたことも無い話

河原ヒナヨ（八十六才）

被爆地…己斐上町一丁目自宅

当時の急性症状…胸が苦しい

家族の死亡…なし

現 症：高血圧・脳軟化症・冠硬化症・変形性関節炎・関節炎・慢性胃腸炎・心不全・
糖尿病・腰痛症

ハワイ移住

己斐上町一丁目で父河原芳太郎、母ヒサヨの五人兄弟姉妹の長女として出生、兄弟弟は若くして死んでしまいました。

私は二十一才の時ハワイ移住の日本人と写真結婚して、ハワイに渡りました。写真と少し違い色の黒い、背の低い人で、ここまで来たのだから仕方がないと結婚したのですが、どうしてもその人を好きになれず一ヶ月で逃げ出してしまいました。ハワイに移住している日本人によく知っている人が居て、きちんと話をしてもらい、男性側が出してくれたハワイに行く為の費用をお払いし別れました。

それから二十七才までアメリカ人の家で子守りをして働き、とても気にいってもらい、ずっとハワイで住みたかったのです。親不孝をし、両親に心配をかけ、お母さんに送金出来る様になり、親孝行のつもりで、お母さんに安心してもらいたく、あの時のお金としては多額だったと思います。送金したのです。ところがお金が付いたのは母の死後だったそうです。それからは手紙で帰る様にと再三に渡り、父よりの便りです。日本に帰り婿養子を買ひ結婚

しました。

不安な日々

自宅被爆です。ドンという間なし二階は屋根がすっぽりはげてしまい。大きなはりが落ち、壁もズリ落ち、二階からすっぽりと町が見渡せました。家の建具が皆壊れ、仏壇も新しかったものが仏具がバラバラに壊れ、中の色が変わっていました。私は二階に居たらどんなひどい怪我をしていたかと思えば、ぞっとします。

次の日、離れにあった工場が屋根ごと、ドサッと崩れてしまったのにはびっくりしました。私は運よく怪我はありませんでした。夫は己斐上町の山で被爆し火傷をうけました。その傷は一、二カ月かかりましたが元気になったのです。ところがピカッと光ったのを見たのと、火事とでしよう、両眼の視力を無くしてしまったのです。私は胸にドサッと爆風が直接当たった様で胸が痛く、苦しく、そのことで毎日不安な日が続きました。

子なく、一人ぼっち

夫は日赤で目の手術をしてもらいましたが、一年も入院生活を送りました。片方のみ幾分か視力が出ました。実父が米屋を営んでいましたが、その米も不足して（その頃は米屋が協

同経営のようにして何とか生計をたてていました、どうにもならなくなり、昭和三十年には米屋もやめました。実父が花を造り町で売って、割にいいお金をもうけてくれましたので、それで生活しました。

夫は目が悪い為に、二階の窓から人の行き帰りを見るのが楽しみでした。昭和四十八年のその日も二階にいました。電気ヒーターが故障したのを自分で修理していたところ、火がふいて着物にも燃えつき、その晩に死んでしまいました。二人の間に子供もなく、実父も夫も死んでしまい一人ぼっちになってしまい、不安な毎日でした。

この上ない安心

昭和五十二年二月脳卒中にて種村外科へ六カ月入院、五十二年の九月から五十三年四月迄は尾長町の岩崎病院へ入院しました。この時冠不全、糖尿病があり、年を経て子供もなく入院生活が続き、退院後奨められて、一人暮らしの心細い生活と将来を考えて、五十三年五月四日ホームに入所させてもらうことが出来ました。

生活状態の違う人が寄り合って生活するのです、色々なことありますが、今のホームの生活は私にこの上ない安心を与えてくれます。人に言ったことも無い話を本に出すと言うことで恥ずかしいですが、とても嬉しいのです。皆さんに感謝します。

繰り返した入退院

宇 野 克 己（七十四才）

被爆地…広島市舟入川口町

当時の急性症状…左上肢ガラス破片で外傷

現 症…不整脈・白内症・胃炎・急性腹症・起立性失調症・動脈硬化症心疾患・神経痛

大阪空襲被災

父清吉、母トワとの長男として広島で出生しました。その後幼い頃、大阪へ移転する。

学校を出て、織物機械の棹を作る鉄工所へ工員として就職しました。十八才の時、工員仲間の人達と力くらべをして、重い物を持ち上げた際に腰を痛め、それ以来腰痛に悩む日々でした。

親の扶養のため婚期をのがし、結婚歴はなし。大阪で二度爆撃にあい焼け出され、着のみ着のままで三十四才の時、石炭車に乗って大阪より帰る。しばらくの間親戚の家にやつかいになり、後から借家を借りて貰い、就職先も決まり、舟入川口町の工場に通い一ヶ月後被爆

致しました。

被爆・その後

工場の屋内で原爆にありました。左上肢をガラスの破片で外傷しましたが、少量の出血程度で治療も受けずに次第に治りました。出汐町の家に帰る途中、鷹橋付近で火に囲まれ、やつとの思いで帰り着きました。

翌日より五日間位、毎日親戚の人達を探し、十日市方面まで歩き回りました。

被爆により工場は焼け、仕事は無く、父は病気にかかり、家は雨漏りがするし又親戚の人の家に厄介になりました。その後しばらくして、近くに鉄工所が有りましたので頼み入れて戴きました。

初めは仕事が無かったが、段々と家も建ち出したので工場も忙がしくなり喜んでいましたが、三十五才頃から病弱体質と馴れない仕事とが重なり、三度も怪我をし死にかけました。又父も亡くなり、母と二人きりになり十年間過ぎましたが、今度は母も亡くなりました。

その後も頑張っていました。が、一年位たってから神経痛と助膜などにかかり、強い薬を沢山飲みました。そのせいか今度は胃腸障害に陥り、約二十九年間養生をしながら勤めた鉄工所を退職致しました。退職後は通院するのが仕事となり、又入退院の繰返しが幾度もあり

ました。

通院の日々

相変わらず病弱なため、通院ばかりの日々でした。年と共に一向に良くなることもなく、今度は段々と目も不自由になり、信号機がついているのも分からぬ状態になりました。生活も思う様に行かず、弟と相談の上ホームに入所する事に致しました。

入所後は色々な面で恵まれていますし、弟も時々面会にも来てくれるし、穏やかな余生を送っています。

被爆体験

久保田アヤメ（八十四才）

被爆地：仁保町本浦自宅前の道路上（爆心地より四km）

当時の急性症状：高血圧症・変形脊椎症

家族の死亡：なし

現 症：高血圧・狭心症・脳動脈硬化症・慢性胃腸炎・腰痛症・変形性背椎症・パーキンソン症候群

洋裁で身を立てる

安芸郡仁保測崎で父藤川岩造、母タマヨの六人兄弟の三女として出生。仁保の大町小学校を卒業。長男善吉は、鉄砲町で機械鍛冶屋を営み、次男は、養子に行きました。三男は、高等学校入学準備中急死。長女は結婚して、二十三才で死亡。次女は十九才で病死。私が一才の時、父は一人でハワイに行き、音信不通。母は髪結いをして生計を立てていたので、私は物習いをしながら、手伝っていました。

二十才の時、ハワイの浜本準之助と結婚の為、ハワイに渡りました。二人の間には子供がなく、主人は、他に女が出来たので、九力年で離婚。後、ハワイで洋裁を習い、昭和二年に母の元に帰国し、子宮癌の手術をした。私が良くなると、母が病気になる、七年間の看病の末、昭和八年に死亡したので、私は母の実家の姓を名のり、一人で、洋裁で身を立てていました。

八月六日八時十五分を忘れる事は出来ません。筆舌にあらわす事も出来ません。布団をかぶり、防空壕に入っていたので怪我はしなかったが、家はバラバラになり、硝子障子は木端

微塵、足の踏み場もなく、命の綱ともいふべきミシンは、裏庭に飛んでいました。

細々と命つなぐ

雨の降るときは、家の中で傘をさし、その場しのぎをした様なことでした。それに、たくさんの方が避難して来て、おかゆを炊くかまどを、五ツも六ツもすえました。そのありさまは、お話になりません。大勢の避難者のなかに、師範学校の先生がおられました。その方が、目をやられて、めくら同然になり、多くの生徒が、ついて来られていました。その人達の食事もして上げました。しかし、配給になるのはハスとカボチャばかりしかなく、たまにある魚も、くさる寸前のもので、本当に困りました。配給米では足りなく、自分の着物を田舎へ持っていく、米や野菜と交換して命をつなぎました。

そして、ほそぼそと洋裁をして、生活の足しにしていました。

感謝の日暮らし

洋裁を一生懸命して生計を立てていましたが、一人暮らしではあるし、年を取り目も薄くなり、ミシンを踏むのもだんだん無理になって来た頃、或る人の勧めにより、ホーム入所を希望致しました。

ホームの設備は良いし、皆さんには親切にして貰い、仏様や皆様に守られて何一つ心配のない、豊かな生活が出来、感謝の日暮らしをさして頂いています。

“お母さん”と叫ぶ声

惣持不痴子（六十才）

被爆地：尾長町の自宅

当時の急性症状：なし

現 症：両高度近視・角膜班・老人性白内障・冠不全

生 いた ち

広島市尾長町にて、父惣持伝、母墨子との一男四女の三女で、八カ月の未熟児として生まれました。姉は長崎市で健在ですが、弟は昭和四十四年心筋硬塞の為、四十二才の若さで亡くなりました。次女は他家へ養女として行き、四女は、生まれてわずかで亡くなりました。小学校五年生の時、角膜炎と言う目の病気になる三カ年休学致しました。昭和十八年女学校

を卒業しまして、家業を継ぐ為、短期養成所に入所して教師の資格を取得し、東本願寺で得度を受けました。

被爆時の状況

八月六日の朝、空襲警報が解除になりましたので、ワンピース姿で座敷の縁側で外を眺めて居りました。突然赤い火が見えたので、「お母さん」と一声叫んで台所迄走って着いた途端に、ドーンという音と共に家がばさばさとゆれ、一瞬に真暗になり目が見えなくなりました。そのまま裸足で裏山の防空壕に避難しましたが、かすり傷一つ受けず本当に不思議な事でした。自分の家だけが爆弾にやられたのかと思って見れば、どこの家もこわれ、火傷をした人、怪我をした人ばかりが歩いておりました。

私の家は、当時寺小屋の様になって居り小学校の生徒が何人か居り、お母さんと叫ぶ声が今だに耳に残って居ります。両親と隣家の人三人で、その防空壕の中で暫らく生活をしました。屋根瓦はメチャメチャ。天井は落ち、足の踏み場もない状態でしたが、晴天続きでしたので家の中を整理しました。

私の寺が焼け残っていましたので、死亡した人の弔いが次々にありまして、外に出て行く事はありませんでした。門徒の若夫人が死んだ子供をおんぶして寺に参りに来られましたが、

正面から光を受けられたのでしょうか、あの奇麗だった奥様は目は潰れ、唇は腫れあがって、醜い顔になられ本当にひどいと思いました。あの人の姿が今以って忘れない事でございます。

被爆後の生活

尼僧として父を助けて働きましたが、昭和三十九年京大附属病院で右目の角膜移植手術を受け、少しは見える様になりました。父を昭和四十三年に亡くし、翌年最愛の弟も心筋硬塞で亡くしました。五十才の時、更年期障害で大病を患い、僧職を引退し甥を後継者として迎えました。昭和五十二年大分県の人と見合結婚いたしました。生まれ育った環境の違いから二年後協議離婚。母と二人生活してましたが病氣になり、別府清瀬病院に入院して居りました。

ホーム入所前後

甥が昭和五十九年一月三十一日広島に帰ろうと、車で迎えに来てくれましたので帰って来ました。家は狭く、母が五月に神経痛になり力田病院に入院しました。私も二カ月後、冠不全という病氣になり、母と同じ病院に入院いたしました。母より私の方が弱く、発作などを起こして親に心配ばかり今迄かけて来ましたので、母と二人ホーム入所を希望して手続きを

し、五十九年十一月十三日にホームに入所致しました。

これから何年生きられるかは如来様だけが御存じの事で、我々凡夫には分からない事です。が、いつまでも末長く御厄介になりたいと念願してやみません。私は入所させて頂く迄、十二、三年間は安堵の毎日です。どうぞよろしくお願い申しあげます。

合掌

息子の遺体は見つからず

花園 コイシ（九十一才）

被爆地：八月八日入市

当時の急性症状：八月十五日頃から嘔吐・脱毛・下痢が長く続きました。

現 症：高血圧症・脳動脈硬化症・起立性低血圧・右肩関節痛・冠硬化症・肺線維症・
高脂症

双三郡和田村和知にて父加場才市、母タカとの長女として出生。明治四十四年双三郡十日市町・花園春市と結婚しました。子供は四男二女を出産いたしましたが、長男は六十六才で

病死、二女、三女は幼くして死亡しました。二男は原爆で死亡しました。夫は昭和十一年二月死亡しました。

昭和二十年当時、自宅は三次市十日市町でありましたが、次男・庫雄が広島市西部二部隊通信兵、三女・セツ子が日赤病院養成所生徒としていましたので、八月八日に息子と娘の生死を確かめる為、基町西部二部隊方面と、千田町日赤方面を歩き廻って探しましたが、息子の姿、遺体をみつける事は出来ませんでした。娘セツコは体数個所ガラスの破片で負傷していました。その晩一晚広島駅にて泊り、翌日三次市へ帰りましたが、八月十五日頃より嘔吐、脱毛、下痢が長く続きました。

被爆後三次市十日市町にて農業をしながら独り暮らしをしていましたが、四十四年頃より、高血圧症になり金子医院で通院治療を受けておりました。

昭和五十四年まで三次市で独り住んで居ましたが、病氣になった為、花園孝幸（孫）の所で世話を受ける事となり、福山市へ行きました。孫達夫婦と約二年団地アパートで同居しました。家が狭いので気をつかいました。同郷人が原爆ホームに入所していましたので、面会に参り見学させて頂きました。帰って娘、孫夫婦に相談し、了解を得て自分から希望して入所しました。何不自由なく毎日暮らす事が出来まして今が一番幸せで一杯です。

すすのよな雨

木村文子（七十七才）

被爆地…草津東二丁目、八月八日入市

家族の死亡…伯母・伯父・従兄

現 症…慢性胃炎・慢性心不全・冠硬化症・不整脈・慢性肝炎・肝機能障害

生いたち

熊本県の三角で、父松宮覚治、母ツネの長女として生まれる。その後、母の郷里の大阪へ移り住み、そこで育ちました。その後、大阪で結婚しましたが、子供は出来ず、主人とは昭和十四年に死別しました。一人で淋しく暮らしていましたが、戦争も激しくなり困りました。そこへ、現在の夫である木村伝太郎の母であり、私の伯母である木村サダに広島に来るよう言われ、昭和二十年六月に広島に来ました。そして、東観音の木村の伯母の家に住みました。

被爆時の状況

東観音から食糧の買い出しに五日市に行く予定が、草津の親戚の家に途中下車し、そこで被爆しました。この日、草津は余り被害はありませんでしたが、すすの混じったような雨が降りました。八月八日に伯母さんを捜しに東観音に帰りました。帰る途中は、きれいに全部、家は焼けていました。道路と一つの中学の運動場がはつきりわかり、印象に残っています。又、人が右往左往して、焼け跡を掘って、何かを捜し回っていた事が印象に残っています。伯母さんが可部へ逃げた事を聞き安心し、鉄橋を這って渡ったりし、この日のうちに、草津に引き返しました。伯母さんは、可部へ逃げた後五日市へ行き、ここで九月十五日に亡くなりました。

大阪へ一旦帰りました。木村伝太郎が、私を頼って大阪へ来ました。そして再婚しました。二十二年二月に又、観音町に帰り、家具業を営みました。

ホーム入所前後

主人が血圧が高くなり、働きにくくなりました。私も体の調子が悪くなり、知人の紹介で、ここに入る気になりました。四十八年十二月三日に、二人一緒に入所しました。入所して一

年余りは、集団生活に順応しにくかったり、入所する前の家族との不和を考えたりして、お金が沢山あれば、ホームに入らなくても済むのにといい、情けなくて、涙が出てしょうがありませんでした。でも今は夫婦部屋に入り、毎日感謝して暮らしています。

水を飲ませてあげたかった

弘 中 マ サ 子 (七十才)

被爆地…宇品町運輸司令部内

当時の急性症状…下痢・首が回らなくなる

家族の死亡…母・全身火傷

現 症…狭心症・胃炎・変形性脊椎症・痔疾・気管支炎

生 い た ち

下関市にて父弘中音三郎、母カヤ(後妻)との六女として出生。父は十一才の時死亡。現在門司在住の姉イネ子と、佐世保在住の兄稔が生存している他は死亡した。

昭和十二年叔父の勧めで、深川出身の中村兼市と結婚するが子供なし。夫は宇品の運輸部に勤務し門司に転勤する。私も宇品の司令部に勤務していた。

被爆時の状況

西観音町の自宅にて母が一人被爆する。私は司令部にいた。西部方面はまだ火災になっていないので、家族が心配な者は帰ってよいとの司令官の言葉。母が気懸りで帰りかけたが、市内は通る事が出来ず、司令部の舟にて井の口についたが、日暮れたので友人の知人宅に泊まる。朝庚午町の叔父宅へ行くと、そこに母が避難していた。顔は焼け腫れて丸くなり、眼も耳も区別がつかないような人相でした。母は私が死んだと思っていたと言いい涙の対面でした。でもお互いに生きていた事を喜び合いました。

八日の暑い／＼照りかえす太陽の中、大八車に母を乗せて叔父が引き、私が番傘で陽よけにして上げて、庚午から舟入橋、大正橋、大手町、千田町と宇品司令部の収容所に行きました。そこに五、六日いて又舟で甘日市の小学校に夜九時頃連れて行かれました。収容所の生活は、まるで地獄で誰かが一人痛いと叫ぶと皆が合わせたように痛いと叫び、又水をくれと叫ぶ。夜も昼もなく叫ぶそんな生活が続き、私も心身共にくたくたに疲れました。よく今まで生きていたものだと思ひます。

八月二十一日午後二時母が死亡しました。水をくれと言っても飲まなかったが、こんなに早く死ぬのなら、腹一杯水を飲ませて上げたかったと悔やまれます。死体は薪を上下に敷き露天で焼くのです。お骨を拾いに行くと腹が焼けていませんでした。お骨だけを拾い、廿日市のお寺で仮供養し、翌日下関で葬式をしました。私は暫らく下関の親類で休養しました。

被爆後の生活

九月に主人が帰宅し、焼跡を整理してバラックを建て、雨風を凌ぎました。主人の姪が子供三人連れて親類に疎開しているのを引き取る為、苦勞して十二月に家を建てました。その頃姪の夫が復員して来ました。

二十四年主人が死亡しました。今にして思えば家を建てるのに苦勞したり、主人の姉を探すのに焼跡を歩いたのが体に悪かったのではと思われまします。

こうして私が一人ぼっちとなり自活の道に進んだのですが、戦後の人の氣持のあさましさに苦勞の毎日が続きました。

六十五才で心臓病に苦しむ毎日。管理手当と国民年金で生計をたてていましたが、借家を売られる為転居を言われましたが適当な家もなく、迷いに迷った挙句ホームに入所する事にふみきました。それまで友達に相談すると反対する人ばかりでした。

入所して一年にならない間に身許引受人になって呉れていた従弟が癌で死亡し、ショックを受け随分心を痛めました。後、義姉の娘に保証人になって貰い幾分か心も落ち着きました。

町内全壊

原 岡 勇 三（八十六才）

被爆地…入市

当時の急性症状…異常なし

家族の死亡…なし

現 症…脳動脈硬化・肝硬化

呉市焼山町で原岡勇松・カズとの間に男四人・女二人の長男に出生した。二十三才で結婚。一女（隼田愛子）をもうけるも妻が精神病となり五年で離婚。三十八才で現在の妻秋子と再婚。一男（二十一才で死亡）一女をもうける。

平塚町に住んでいたが、建物疎開のため二十年三年三十一日、妻と娘は熊野町に疎開させ

た。宇品造船所に勤務していたので、上流川町の叔母の借家の離れで生活していたが、八月四日熊野町に帰る。七日早朝、歩いて宇品の勤務先に行ったが、誰一人居なかったので間借り先に行く。町内全壊してあちこち死人が転がっていた。叔母も見当たらなかったが、後日九州へ帰っていたが原爆症で死亡したと聞く。

横川町に妻の本家があった。雨の降らない日に、親戚の遺体を探して歩いたり、勤務先の宇品造船所の整理をしたり、同僚を見舞ったり、就職の事で歩く。八月八日は、親子三人で上流川の住居跡から瓦かまどの下を三十センチ程掘って、米三キ口位入っていた瓶や湯呑や皿等持つて帰った。米は黄ばんでいたが、翌日その米と麦をまぜて食べたら娘が下痢をした。広島に住めないと聞き、退職して、二十年十一月十六日呉市広町の弟の家に同居していた。のち広工廠の官舎に入居させて貰った。呉の焼跡の片付けや魚の行商をしたりして生計を立てていたが、失業対策事業が生まれ就職する。

その後、老齢福祉年金、管理手当てで生計をたてていたが、娘は島根県に居住し、非常時にも役にたたず、妻も高齢で病弱なので毎日の生活が不安なため、将来を思つてホームに入所しました。妻と同室で、何不自由なく暮らし、友達も多く出来、毎日をありがたく思つて生活しています。

日雇いをして娘を育てる

工 西 チ エ コ (七十九才)

被爆地…入市

当時の急性症状…十一月頃脱毛

現 症…変形性背椎症・高血圧症・脳動脈硬化・狭心症・胃炎・腰痛症・パーキンソン症候群

父大和勝太郎、母トヨとの間の四女として向洋の堀越で生まれました。三十才の時、夫・工西音一と結婚し、二女を出産しました。

自宅は現在の観音新町でした。昭和二十年八月五日に長女と姉と共に、岡山へ白桃の買い出しに行き、八月七日の帰りは、汽車が海田までしか走らないので海田の姉の家につき、主人を探しに市内へ行きました。市内は水、水と言って沢山の人が転げており、まだ煙も出て燃えていました。

主人の怪我の手当てで六カ月余り、海田の姉の世話になりました。昭和二十五年、原爆症

と脳卒中の為、主人が亡くなりました。その後、日雇をして、二人の娘を育てました。

年をとり、腰膝が痛くなりました。娘達が家に来る様に言ってくれましたが、長女の家には舅、姑を抱えていますし、二女も舅が健在の為、気兼ねで行く事も出来ず、当ホームに知人があり、すすめられ、入所に踏み切りました。

家屋全焼

矢野喜代子（七十三才）

被爆地…横川町二丁目

家族の死亡…なし

現 症…低血圧・貧血

生いたち

市内西引御堂町で汐崎熊次郎とタケヨとの間に男二人女三人の長女として出生。父は古着屋と質屋を営み、祖母と番頭二人、女中の十一人でとても賑やかな家庭でした。

広瀬小学校から山中高女に進み、昭和三年に卒業。母が弱いので、祖母と私は兄弟姉妹の世話で大変でした。私が二十一才頃母が元気になりました。それ迄私は裁縫、生花、お茶、三味線と習い物に大変でした。父は松山の生まれなので、毎年四月になると親の墓参りと道後温泉に行くのが定まりでした。私はいつもついて行き、親戚の子供達とよく遊びました。

昭和十一年一月に縁あって矢野要吉と結婚しました。主人は兄弟が多いので、私達は皆実町の父の借家で暮らす事になりました。一寸便利が悪いので、四月頃段原東浦に引越しましたが、十三年に主人の兄が津和野へ転勤になり、主人の実家に帰りました。十月に実家の父が死亡し淋しくなりました。その頃主人の兄が帰って来ました。兄一家と世帯を別にしました。

十四年に長女を出産しましたが、何となく家の中がぐたくして、私達は十七年頃実家の借家の横川町へ引越しました。家賃も安くしてくれやとと落着きました。その頃祖母が死亡しました。二年位して主人が病死しました。結婚生活八年間と短い月日でしたが、私には楽しい日々でした。遊んでいられないので近所のハカリの修理工場で働くことにしました。子供を隣家へ預け、勤め始めて一年位で原爆に合いました。

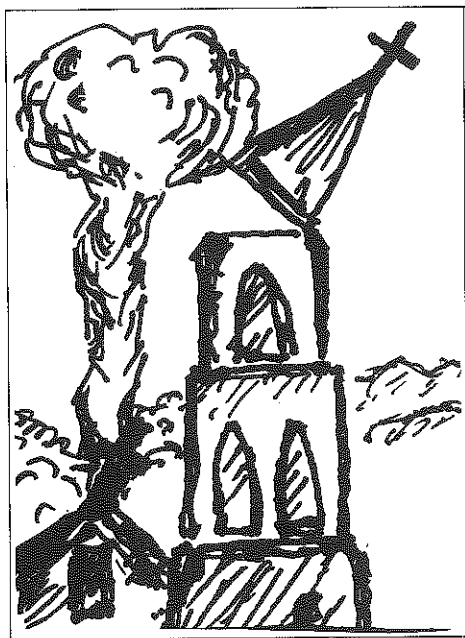
被爆時の状況

風邪で工場を休んで寝ていました。六日は私が勤労奉仕に出る日でしたが、隣りの奥さんに行つて貰う事に話が決まりました。前夜空襲警報があり、避難したりしてしんどくて台所に横になっていました。突然ピカツと光り、大きな音がして気を失っていました。何分経つたか分かりませんが、子供の「お母ちゃん」と呼ぶ声に気づきましたが、何か重い物がかぶさり身動きが出来ず、一生懸命に体をゆすつたらかぶさつた物が落ちたので、すぐ子供の声のする方のそぎや板切れをのけると、怪我もせず元氣なので喜びました。玄関や部屋はペンシャでしたが、幸い台所の屋根が落ちなかつたので助かりました。

表通りに出て驚きました。周りの家は皆倒れていました。私は途方にくれていましたが、早く逃げないと煙にまかれてしまうと言う声がしたのでハッ!と気がつき、中原のおばさんと三人で三滝の方に逃げました。途中道路はガラスの破片や板切れ、釘が散乱して足の踏み場もない位でしたが、私達は走って行き、山と山との狭い峠のような処に逃げました。中原のおばさんは山の上の知人の家に行きました。

だん／＼と人が集まって来ました。皆いろいろと逃げて来た時の事を話し合っていました。その内に雨が降って来たので、近くの陸軍病院の分院に兵隊さんが屋根を作ってくれました。

そこで雨を陵ぎましたが、すごく寒くなり震えていましたら、毛布を貸して下さり、とても良くして下さいました。雨が上がり陽も射して来たので山を下り始めました。大きな荷物を持った人が休んでおられ、私達が通りかゝると荷物の中から草履を出し、履いて行きなさいと親切に言っして下さい有り難く頂きました。少し下に行くところのおじさんに逢いました。家は皆焼けてしまったと言われ、驚き確認に行きました。本当に丸焼けで、仕方なく避難所の安村に行く事にしました。途中大傷の人や怪我をした人に逢い本当に気の毒でした。祇園町についた時、警防団の方に乾パンを頂きかじり乍ら歩きました。



(画・宮本二三夫)

山本村の小学校に避難者達は集まり、人数を調べて安村から迎えに来た人について行きました。安村に着いた時は日が暮れていました。広い庭に簾を敷きそこでおにぎりを頂きました。朝から何も食べていないので美味しかったです。安村に三日程いて罹災証明を貰い、九日朝広島に向い三篠町に入った頃は未だ煤っていました。三篠橋を渡り白島から常磐橋に出ました。橋の袂に裸の死体が積み重ねてありました。本当に可哀相でした。

広島駅に着いたら丁度汽車が停車していたのですぐ乗りました。満員でした。私達が親戚の「五石」の家に行くと弟や妹が来ていました。上の妹は未だ不明とのこと。母は買い出しにこちらへ来ていて助かりました。私の事を死んだのではないかと心配していたそうで、元気な顔を見て喜んで呉れました。

妹は顔の傷と足にガラスがたち込んで苦しそうでしたが、知り合いの看護婦さんに治療をして頂いたので傷は治りましたが、瓦斯をたくさん吸ったので高熱が続きました。弟も傷は軽かったけど、瓦斯のため十五日終戦を過ぎた頃より高熱で毛髪が抜け始め、苦しみ出したので近所の医者に治療を受けましたが、八月末に死亡しました。母や私はがっかりし、私は疲れ十日間位休みました。上の妹が広島の実家で死んでいる事が分かり、石油や薪で実家の庭で焼きお墓に埋めました。

被爆後の生活

二十一年に子供は瀬野小学校に入学。四月中旬、母は皆実町の家賃の集金に行き怪我をし、大腿部骨折で動かせないので山本家で世話になってしていると聞き、子供を叔父に頼んで看護に行きました。山本家は狭いので、段原の借家が空いたので引越しました。母も良くなったので、皆実町の家にも八月の夏休みに引越す事となり、子供を引取り、瀬野の親戚に預けていた母と私の荷物も引き取り、やっと落ち着きました。

三十二年に弟の嫁が二人子供を連れて満洲から引揚げて来ました。それまでは売り食いしていましたが、人数が増えたので、私と嫁が働く事になり、私はハカリ修理工場へ勤めました。子供は母が見てくれたので安心して働けました。何とか生活も落ち着いた頃弟の戦病死が分かりました。

それから種々な職業に就きながら子供を結婚させました。四十五年には母も死亡しました。それから二年半位して体調が悪くなり、貧血症で日赤に入院。一カ月で退院しましたが、再発して二カ月位入院しましたので勤めを辞め、ホーム入所を決意しました。手続きに行くとき空ベッド待ちを言われました。腰痛があるので石川病院に受診すると、脊中の骨が少しつぶれかけているとの事で入院し、二年位経ってホームの空ベッドがあるとの連絡で入所しまし

た。

所長様初め事務所の方々や寮母さん達みんなに親切にして頂き、感謝の日々で老後をとて
も楽しく暮らしています。

右手一本で這い出る

岡 山 里 市（八十七才）

被爆地：舟入中町（一・五km）

当時の急性症状：左上肢及び左下肢に怪我

家族の死亡：なし

現 症：前立腺肥大・慢性胃腸炎・心不全・貧血症・肝障害・腰痛症・痛風

生 いた ち

佐伯郡湯来町で、父岡山幾太郎、母マチとの間に四子のうち、長男として出生しました。
三十才の時、木下芳子と結婚するも、入籍するのが、のびのびとなりホームに入所しまして、

昭和五十六年六月五日に婚姻届を出しました。第一人は、戦死。末弟は、五日市町にて健在であります。妹も五日市町で生活していましたが、五、六年前に死亡しました。

被爆時の状況

馬車引をしたり、馬等を車などに売って生活をしていました。八月六日早朝、消防団の召集があったので、いつもの朝食が遅くなり、食事中に被爆しました。気絶し、気がつくと、左側の身体が家の下敷になっておりました。着ていたナツパ服を口で引きちぎり、右手一本でどうにかこうにか這い出ることができ、トウマイ袋（米類などを入れる袋）を濡らし、頭よりかぶり、火の海と化した観音橋を渡り、下迄歩き福島川のはとりの製糸工場の下で渡し舟に乗せてもらいました。己妻まで来た所で歩くことができずしゃがんでいましたら、兵隊さんが、あまりにひどい怪我なので注射をうってくれ、足に五寸釘がささっているとわれ、初めて気がついたらしいです。その時、雨がふっておりました。

重傷患者用の車で、津田に行くと言う車に乗してもらい、廿日市町国民学校に避難した時は夜でした。教室の中は重傷患者でいっぱい、口々に助けを求めさけんでおりました。患者か看護婦かわからないが、婦人の一人が、むすびを一個くれたのを美味しく食べたのが今でも忘れられません。消防団の人に会い、弟妹に連絡をたのみ、妻芳子は十七日目に看護に

来てくれました。被爆時、妻芳子は、トイレに行っており、怪我はしていませんでした。廿日市町国民学校には、約三十日間おりました。

当時原田外科の院長が、砂谷で診療所を開業していたので、約百八十日間入院しております。その間芳子が看病をしてくれました。被爆時、左手におちゃわんを持っていたため、手が湾曲に曲っていたのと、傷のために六回も手術を受けましたが、手は、湾曲のままでありました。が、八十六才になる叔母が、毎日念仏を唱えながら手をもんでくれておりましたら、ある日、指が少しずつ動く様になり先生、看護婦さん等が、びっくりされておりました。今日手が動くのもその叔母のお蔭です。

ホーム入所前後

被爆前に、妹に現金を預かってもらっていた（その当時家が建つぐらい）。その金と、屋根ふきの手伝をしたり、舟の積み荷をおろしたりして、色々な仕事をして生活をしていました。その後、老齢福祉年金、管理手当て生計をたてていたが、子供がなく高齢で身体も弱く、妻も同様であり、どちらが死亡しても生活に困るので、ホームに入所を希望いたしました。入所しましてからは、何に不自由なく暮らしていますが、妻芳子が目が悪いので、治療に毎日眼科に通院介助しています。一日も長く生きて妻の面倒がみられたらと思う毎日です。

何とも哀れな姿

上 田 澄 子（七十才）

被爆地：八月十日皆実町に入市

当時の急性症状：なし

現 症：胃術後、動脈硬化性心障害

生 いた ち

台湾台北市にて父松本政三郎、母シズノとの二男三女の長女として出生。小学校四年生の時に内地に帰り、佐伯郡廿日市小学校に転校致しました。昭和十四年六月漆器を作る所に務めておりました上田恵と結婚し、三男を出産しました。

被爆時の状況

皆実町に住んでいましたが、被爆する一カ月前に、当時妊娠七カ月で二人の子供がいまし

たので主人を残して、沼田町伴の義妹の姉の家に一間借りて疎開をしてましたので、直爆は免れました。

八月六日、私達親子は朝食を済ませた時でした。大きな爆音がして変だと思って西側の障子を開けた途端、目前に白带状の物がスーッと通り、広島空が真赤に染まり、みるみるうちにそぎや新聞紙が飛んで来ました。部屋に入って見れば、廊下側の障子は奥の襖迄飛んで、障子の骨は折れ紙はボロ／＼になって大変でした。外に出て見ますと、背中から袖口等破れ、赤身が出て大火傷をした哀れな姿をした人達がぞろ／＼と行列をして避難して来られ、病院の中庭一面に寝転んでいて、何とも哀れな姿が今でも忘れられません。

建具は破損しましたが、親子怪我もなく無事でしたが、広島に残した主人と妹の主人も帰っていないので、心配の余り八月十日、妹のお母さんと一緒に歩いて捜しました。横川辺りで別れて、私は御幸橋を目標に歩きました。途中随分の死体に会い、あちこち積み重なり、目をおそう様にしてどん／＼歩いて皆実町の自宅にたどり着きました。主人が無事でしたのではとしました。自宅のガラス戸はみじんに壊れ、襖はメチャメチャで、足の踏み場もない有様でした。主人は戸の壊れたのを捨てて来て窓を修理したり、寝られる様にしてから、死体の始末の手伝いをしていると聞きました。子供を二人おいて出ましたので、沼田町へ帰りました。原爆の為身内を五人亡くしました。

被爆後の状況

終戦後は、体の具合が悪い日が続きましたが無事出産し、宮参り頃、子供達と一緒に馬車で皆実町の自宅へ帰りました。一家揃つての楽しい生活も束の間、原爆によつて主人の性格が変わり、精神的な苦勞が主人が病死する迄続きました。

私も五十一年悪性腫瘍（胃ガン）になり手術を受け又、五十二年と二年続けて大手術をしました。二度目の手術の時には胃を全摘出し、食道を一分位切り取り腸とつなぎ合わせたので、無理をしてはいけないと忠告を受けました。長男が何もしなくてもよいから同居しようと言ってくれましたが、未だ小さい孫が三人も居りますので無理をするのではないかと思い、一人で生活をしてました。或る日肺炎にかかり熱が高く出て、一人で寝ていると食事療法はせねばならず、貧血がひどく心細く感じて居りました。

福祉の方が来られて色々懇談しましたら、養護ホーム入所を申し込まれてはと言つて下さり、ホームの中を見せて貰つて直ぐ申し込み、五十七年六月二十四日入所致しました。入所後は皆様によくして頂き、自分も毎日感謝の気持ちで、暮らさせて頂き喜んでいます。

仏様の前で合掌の日々

沖 中 カツ子（七十九才）

被爆地：榎町に八月八日、九日入市

当時の急性症状：下痢が暫らく続きました。

現在の症状：狭心症・脳動脈硬化症

私は佐伯郡五日市町に於いて、父沖中九兵、母スエとの間、四男七女の七女として出生。兄弟姉は死亡し、父は七十九才、母は九十才で亡くなりました。結婚は母親の世話と、私が病弱でありましたのでませんでした。

被爆時、自宅は五日市でありましたが、勤務していた佐々木家具店の工場長の依頼により、榎町の壕に埋めてあった、炭・家具等を掘りに八月八日・九日の二日間入市いたしました。

被爆後、三和印刷工場に務めながらお寺のお手伝いをしまして、三十六才の時仏門に入り得度を受け、約二十五年間布教して歩きましたが、体も弱くなり、民生委員からのすすめで、

草津町で約十三年間、独り暮らしをしてました。姪と同居致しましたが、姪も病弱の為、自分から希望して、五十四年三月、可部町の緑が丘静養園へ入所しましたが、姪の家とも離れてゐるし、又静養園が寒い為、養護ホームに入所させて頂きました。

ホームに入所しまして、寮母さんが夜中に何度となく室を見回って下さり、安心して毎日を送らして貰っております。今は何不自由なく生活出来ますのも、若い頃の仏門での修行のお蔭だと毎日仏様の前で合掌して居ります。

広大白菊会に入会

岩 本 ハツミ（八十二才）

被爆地…稲荷町の自宅（一・四km）

当時の急性症状…外傷なし、両足打撲

現 症…動脈硬化症・糖尿病・冠硬化高血圧・十二指腸憩室・筋肉痛・慢性腸炎・眼周
囲皮膚炎・腰痛

生　い　た　ち

高田郡吉田町常友で父小一、母サツの長女として出生。姉二人は小さい時死亡し、妹一人は生存しています。父は大正二年死亡しましたので苦勞をしました。農家なので妹を、おんぶして学校へ行き、田畑を手伝いながら裁縫を習いました。二十才の時養子を迎えましたが、結婚生活二年で別れました。

昭和十五年頃従兄・秋田省太郎と結婚の為、マニラに行きました。主人は領事館の仕事をしていたが、支那事変が始まって居りましたので、昭和十六年十一月一人で内地に帰りました。帰る時ミシンを持って帰りましたので、内職をして生計を立てておりました。主人は私が内地に帰って一年後、マニラで病死しましたが、戦争が激しく、行く事は出来ませんでした。

被爆時の状況

稲荷町の自宅で被爆。家は崩れ、下敷になり、両足は打撲して紫色になりましたが、別に怪我はありませんでした。歩いて戸坂に出て、深川の小学校で其の晩は一泊。深川より汽車で吉田町の母方の家に帰り、六日間滞在して、妹の所・東本浦町を頼って行き、子守りをして

居りました。半年後、食糧事情が悪いので田舎へ帰り、昭和二十六年迄百姓をしました。

被爆後の生活

妹の勧めで昭和二十六年広島に出て、松原町の電気店で住み込みで働きました。昭和三十六年田舎の山、木、畑を売って東雲町にお店を持つ事が出来ました。子供相手の玩具店を開きあまりひどい病氣もせず、二十年間商売をして居りましたが、自分も年をとり体も弱って参り不安になりましたので、市役所に入所の手続きをしまして、昭和五十六年六月養護ホームに入所しました。

入所しまして毎日の生活が楽しく、書道、張絵クラブに参加して居ります。大きな病氣もせず、み仏様と共に何不自由なく感謝の気持ちで暮らして居ります。何か医学の為に少しでもお役にたてばと思い、昭和五十九年九月二十日、広大白菊会に入会しました。何の悔いもありません。これから先、み仏様と共に一生を歩む事こそが私の念仏として喜んでおります。

妻を白血病で失う

大 滝 三 郎（七十才）

被爆地…広島市打越町二〇七番地

当時の急性症状…背部に打撲症を受ける。三十八度位の熱が続きました。

家族の死亡…昭和五十五年三月一日、妻白血病にて。

現 症…不整脈・虚血性心疾患

北海道松前郡松前町大字唐津内52番地にて、父勘三郎、母トミの三男として生まれました。小学校卒業後、広島叔父宅より中学校に通いました。中学校卒業後、昆布加工の会社に勤務し定年を迎えました。戦時中は三菱造船へ徴用されました。

昭和二十二年七月シブエと結婚しましたが、子供は恵まれませんでした。

打越町の屋内で被爆し、家が倒れて背部に打撲を受けました。命からがら取るものもとりにあえず逃げるのが一番でした。川向の竹やぶの中で一夜を過ごし、その後定められた古市町

の小学校へ避難し、数か月そこで生活しました。

二年位は仕事もなく、取りあえず焼跡の整理をした。その後会社勤めをし定年となり、のちに夜間警備員として七、八年働きました。

妻が白血病で昭和五十五年三月に死亡したので、子供もなく只一人になりましたので、被爆者の老人養護ホームが有る事を知り、昭和五十七年六月二十四日に入所致しました。入所後は生活の心配や他いろいろとして戴くので、毎日を安心して暮らしています。

死にたいばかりでした

中 井 愛 子（八十二才）

被爆地：広島市牛田本町神田六丁目

当時の急性症状：手、足、顔など火傷

家族の死亡：次男

現 症：脳動脈硬化・関節炎・肝障害・胆のう症・慢性胃炎・情緒不安定

父渡部浦太郎、母チカの三女として出生。二十三才で中井肇と結婚するが後妻である為、先妻の子、男子二人あり。女子二人出生する。

被爆時、広島市牛田町に居住してました。その朝五才になる次男が遊びに外に行って居ました。子供を連れにいった所でピカッと光り、大きな音をたてて爆弾が落ち、一面は火の海と表現のしようありません。

子供をはじめ、一家が大火傷と負傷を負いました。次男が一番火傷がひどかったです。また主人は町内の事務所で被爆。大きい子供は学徒疎開してました。

次男は被爆後五日目に、火傷が原因で被爆死しました。長男他学徒疎開より八月十三日に帰宅しました。私も火傷が重く、食事もとれず、死にたいばかりでしたが、知人から福岡の大学病院を紹介してもらい、火傷の治療に二か月間入院し、顔の手術をし、お蔭を持ちまして快く退院致しました。

主人はその後昭和三十一年被爆のため亡くなりました。その後は長男宅で暮らしました。祇園町西山本の長男宅で生活するも、嫁（嫁と言っても姪に当る）と折合が悪く、知人又娘達の勧めもあってホームへ入所致しました。

お蔭を持ちまして毎日感謝の気持ちで楽しく老後を送って居ります。ありがとうございます。

平和運動を続けたい

吉 田 数 雄（七十三才）

被爆地：広島市宇品一丁目

当時の急性症状：後頭部ガラス破片傷、三か月痛む。

家族の死亡：義姉、二十一日頃死亡

現 症：白内障・脳動脈硬化症・変形性脊椎症

生 い た ち

明治四十四年十月三十日、広島市広瀬一丁目にて父米吉、母サダの四人兄弟の次男として出生するも、兄弟とは全部死別する。

広瀬小学校から修道中学へ進み、卒業後（丁度満州事変当時）は大手町の速記学校に入り、速記学生として戦争反対運動に参加する。

又、本川小学校で支那語を学ぶ。日支事変頃は労働大学生として暗い時代でしたので、明るい平和な日本を願いつつ生活していました。

其の後、食料品販売業を営み、三十才の時、中野タミ子と結婚する。

被爆時の状況

松山市に居住して居ながら、丁度八月六日は商用の為広島に来る。広島方面の空が真赤に燃えていた。近くを通る人達に防空壕に入る様すすめられるも入らず、反対方向に逃げて行く。

逃げる途中爆風で家の窓ガラスが飛び散るし、被っていた帽子が飛び、ガラスの破片で後頭部に傷を負う。傷口を洗おうとして近くの水道栓をひねって洗っていると、直ぐ出なくなつて困った。その後雨が降ったので、今度は近くの防空壕へ入らして貰っていると、服はボロボロに破れ、顔や手の方あちこち火傷をした人達が避難して来られた。

被爆後の生活

八月八日、妻の兄弟が横川町に住んでいたので見舞つて行つた。

終戦後、妻とは話し合いの上生別する。子供二人は妻が扶養することとなる。

昭和二十三年肺浸潤になり国立病院へ入院、半年位で治療の甲斐あつて退院する。その後は外交員や火夫などをしていたが、今度はリウマチになり、安静を怠つて苦しみました。

あれこれ病氣に掛り、苦しみ、病院通いの日々でしたが、その頃丁度ホームが百床増になった事を知り申し込みました。お蔭で入所出来ました。生活の心配もなく、入所後は安保・被爆反対、援護法成立のため元気で動ける限り運動を続けて行きたいと思い、自分なりに一生懸命運動に励んでいます。

それは哀れでした

川 西 寅 枝（八十二才）

被爆地：西観音町一丁目

当時の急性症状：なし

家族の死亡：なし

現 症：慢性気管支炎・肺性心・気管支拡張症・腰痛・変形性脊椎症・脳動脈硬化症・

歩行障害・腹壁化膿症

奈良県吉野郡秋野村広橋にて父穂迫庄造、母くにとの間の五人兄弟の長女として生まれる。

十六才で大阪へ出て、メリヤス製造所へ勤めた後、理容師の川西平三郎と結婚する。店は繁盛していたが、いろんな事があり、広島に来る。その後、西観音町に店を構える。

被爆時の状況

被爆時は家に戻り、家の下敷となり、腰と左膝の関節が砕け、足も動かなくなりましたが、だんだんと良くなりました。この日、黒い雨が降りました。丸裸の女の人、腕の皮がはげてぶら下っている人、耳がちぎれてぶら下っている人等、いろいろな人が逃げてこられました。私達は福島橋の下に逃げました。死んだ人、死んだ馬、死んだ牛、死んだ犬、こわれた家等が流れてきました。黒い雨にかかった人は皮膚病になりました、それはそれは哀れでした。又、食べる物がなくて困りました。何日かして雑炊を売りに来て、それを買うのに列を作っていました。それに水も出なくて、ポンプ水を飲んだのであります。そうしますと下痢をしまして困りました。幸い近所に親切な方がいらつしやり、宇品まで歩いて薬を買に行つて下さいまして、それで助かりました。防空壕で二年間過ごしました。

被爆後の生活

観音町で理髪店を始めました。主人も年寄った為、四十年位経営していた理髪店を売り、

大阪の長男の所へ行きました。しかし、若い者に迷惑をかけられないので、又広島へ帰り友人の世話で観音町に住みました。

入所前は、ただもう食べる事に一生懸命でありました。ある人が、こんな良い所があるのよと教えて下さり、すぐ市役所にお願ひに行きました。そうすると「さあ、どうぞお入り下さい」とおっしゃって下さいまして、地獄で仏の様な思いで入所させて戴きました。入所させて戴いてから何の心配もなく、過ごさせて戴いています。こんな嬉しい事は御座いません。感謝、感謝で一杯で御座意ます。有難う御座います。

恐ろしさに震える

小 松 シズエ（七十一才）

被爆地…福島町（一・八km）

当時の急性症状…発熱し下痢が四、五日続く。

家族の死亡…父、長姉、妹二人、弟

現 症…両膝関節症・多発性関節炎・左大腿部頸部骨折後遺症

生いたち

広島市内で小松藤次郎とスミとの間に二男五女の三女として出生。観音小学校卒業後、父母が商売しておりましたので、店の手伝いやら弟妹の面倒を見ておりました。

十五才頃暇を見てはいろんな習いごとをし、十九才で結婚しました。昭和八年長女、十二年に長男を出産しました。十二年母が病死しました。

被爆時の状況

六日の朝、幸い家の中でしたので火傷はありませんでした。自宅に爆弾が落ちたものと思い、姑さんと二人だけでしたので夢中で己斐方面に逃げました。後からぞくぞく火傷や怪我をした人達が来られ、一緒に古江方面に逃げました。皆、畠の隅の方で恐ろしさに震えながら、どの位時間が経ったか覚えていません。

その内、私だけが近所の人をお願いして、ひと先ず家に帰って見ました。八帖二間、六帖二間が倒れかかっておりました。離れの二階建はぺっちゃんこに崩れておりました。姑さんと二人で帰りました。子供は学童疎開でしたので助かりました。私の実家の家族の事が気に懸り、七日、八丁堀の家の方に行つて見ようと思いました。東の方から火事で行く事が出来ま

せんでした。天満橋までで火は止まりましたので、八日の朝から半日掛りでやっと辿りつきました。

父は冷蔵庫の前で死亡していました。只茫然として何をして良いやら分からなくなり、そのまま我が家に帰りました。

天満町にいた姉が私の家に来て、お互いの無事を喜び合いました。

父の死、又姉妹弟たちの行方が分からないので、姉と二人で八丁堀に行き、父の骨を九日に持ち帰り、その足で家族を探しに己斐の山、三滝、井の口と随分歩きました。しかし分ならず、それから四、五日探しましたが、何処で死んだのやら遺骨も分らない状態です。

天満町の姉の家は丸焼けでしたので、長男の家が三篠の畠の中にあり、そこに落着きました。

被爆後の生活

八月十五日ラジオで終戦を知りました。皆帰って来ないのでもう探しようもなく、その内私の体調がおかしくなり病に倒れましたが、どうやら助かった次第です。

三年後事情がありまして主人と離婚。暫く姉の家に厄介になりました。体調も思わしくなく、長い間寝たり起きたりの状態でしたが、何時迄もこのままではと思い、心に鞭打ちなが

ら十日市町の小さな食堂の店を譲り受けました。近くの病院に通いながらですから、お店の方も休みがちでした。

ホーム入所前後

ホームにお世話になる迄県病院、記念病院へ入院の繰り返しでした。最後の入院は舟入の浜脇病院でした。家の庭で転び、すぐ救急車で運ばれました。股関節骨折でした。約一年ばかり入院していました。

いろいろ考えた末、ホームにお世話になりました。こちらに参りまして、本当に皆様の行き届いた御親切に毎日を楽しく過ごさせて頂いて居ります。心から感謝の気持で一杯でございます。

健康管理に留意

高 木 平 八 郎（六十九才）

被爆地：吉浦の無人島

当時の急性症状：脱毛、歯ぐきより出血があった。

家族の死亡：姉、妹

現 症：甲状腺機能亢進症・糖尿病・慢性肺気腫・脳動脈硬化症・右湿性肋膜炎

下関市にて父高木伝吉、母ヨネとの間に一男一女の長男として出生。二才の時母、姉、私の三人で本籍地広島市土橋町に居住する事となり、塗装工として見習い中、昭和十年下関の第十二師団重砲兵聯隊に入隊。中支、シンガポール、揚子江沿岸に配備されたりして、昭和十九年十月に帰広。昭和二十年八月六日は四十人余名を連れ、呉市吉浦の無人島へ防空壕掘りに従事していました。

広島に原爆が落ち全滅だと知ったのは、八月七日でした。当日、呉より午前九時頃広島入

りし、家族の消息を知りたく元の居住地を尋ねたが、家は焼け家族は誰もいませんでした。死体処理等の仕事をしながら、焼跡から木や瓦等拾い集め仮の居住を造り、家族の帰るのを待ちました。

それから一か月後、身体の異状を知りました。その当時人の話に、頭髮が抜け、齒ぐきから出血し、体に斑点が出ると死ぬんだと言う事でした。私は脱毛と齒ぐきより出血しました。被爆後は塗装工として東京、名古屋、大阪、神戸と建築現場を移動しました。三十年程前、仕事中に二階より落ち腰を骨折し入院しました。後遺症のため、ギックリ腰のような痛みを十五、六回繰り返し、三年前より仕事が出来なくなりました。

私は短気な性格で、子供や妻に暴力をふるい、次第に疎外され、妻はそれぞれお互いに生活したいと言う考え方なので、ホーム入所を決意しました。入所後五十八年九月十七日湿性肋膜炎のため舟入病院に入院。五十九年四月退院し、以後ホームで健康管理に留意しています。

真 赤 な 血

宮 川 雪 子（八十一才）

被爆地…広島市白島東中町

当時の急性症状…額切傷

現 症…脳動脈硬化症・高脂血症・変形性膝関節症

生 い た ち

安佐郡三篠町楠木にて父冲謙三、母シカとの間に三男五女の四女として生まれる。生家は醬油問屋をしており、山中女学校を卒業し大正十二年三月三十日宮川政城と結婚した。夫は神戸女子商業や親和女学校の教師をしていたので神戸で結婚生活を送りました。

生まれた三人の子供は死亡しました。夫は昭和七年二月五日死亡。三男政泰を昭和七年五月二日出産し、姑と広島市白島町で三人で暮らしていました。十七年に姑が死亡しました。

被爆時の状況

自宅で洗濯物を干して、次の干物を取りに入ったとたんピカッと光って倒れました。防空ごうに落ちたと思いました。柱の下敷になり右前額を打ち怪我をしました。少し明るくなつて政泰の名前を呼んだ時、ここですよと返事があった時は嬉しかったです。着物を何枚着ても真赤な血に驚きましたが、圧拍治療し、工兵橋に逃げました。工兵隊の作業地に行き、トタン屋根をしてもらい、四人で夜明しをしました。七日朝黒い雨が降り、西原の宮へ行つて民家で泊まる。八日に自宅を見に帰るとまだ燃えていた。仕方なく知人のお子さんが行方不明と言われて探し歩き十四日の夕方宇品で見つかったので、可部の母の実家宅で二、三か月暮らしました。体には異常はありませんでした。布地、薬品を買いだめして疎開していたので不自由はありませんでした。

被爆後の生活

昭和二十年十二月、稻荷町の親類をたより、その近くに六帖一間のバラックを建ててもらい、十二月八日引越し筈の子生活をしました。京橋より稻荷町迄七軒しかなく、その淋しさは口に出して表現出来ません。足音に目がさめ、しばらくは寝つかれず困りました。しばらく

くして江波栄町へ移り大学生の下宿屋を始めました。

ホーム入所前のこと

昭和五十三年九月より脳動脈硬化症、高血圧、変形性関節症の為、力田病院に入院しました。三男は大阪に単身赴任し、嫁は病弱なのでホーム入所を決心しました。

人は死んで天国に行き幸せになるといわれますが、私は現在が天国でございます。ホームの職員の方々の優しいお心づかいに、毎日毎日がただただ有難く嬉しく過させていただいております。

河に浮く死体

住 田 唯 雄（八十一才）

被爆地…暁部隊運輸部衛兵所前

当時の急性症状…なし

家族の死亡…なし

現 症：狭心症・胃潰瘍・高血圧症・痔疾・左室肥大・過敏性大腸・膀胱炎・急性気管
支炎・便秘症

山口県玖珂郡美和町にて、父池本種松、母キヌとの間、男二人、女三人中、次男として出生する。西村組土木に勤め、三十二才の時住田フサと職場結婚し、養子として入籍する。昭和十四年、長女幸子を貰ける。

八月六日、宇品町にあった暁部隊運輸部衛兵所の前で光を受ける。負傷がなかったので全員集合して各班に別れ、自分は十一連隊に行き、指示に依り自動車部隊として十月迄死体及び歩行出来ない市民の救助にあたる。死体は河に浮いている人達が多かった。その人達を集め、十一連隊の兵舎の中で一日に十五人ぐらいづつ火葬にした。東雲町の自宅が全壊した為、妻や子供を従兄のいる東広島市へ避難さす。怪我はなかったが、十か月後より頭部が全部脱毛した。それより頭痛がする様になったと思う。

妻の避難先へ落ち付き、富士工業土建に務め十年ばかり過す。昭和三十年頃本浦町へ帰り、中田建設に勤め、五十年頃迄勤める。三十三年頃より狭心症で治療を受ける。妻フサノが、四十七年に脳出血の為七十四才で死亡する。その後、一人暮しをしていたが狭心症発作が度度おこる為、主治医に勧められ、五十二年五月より娘幸子宅に身を寄せ、二年間ぐらい同居

する。

娘宅の家が狭く、婿に気兼ねもあり、可部福祉事務所の相談員に勧められ当ホームに入所する。あまりにも良い所なので早く入所すれば良かったと思う。夜八時頃、食堂にて三合ぐらい晩酌するのが一日で一番楽しみです。

近頃は心臓発作がおき頭痛はするし、腹痛はあるし、薬に頼って生活している日々です。

鎮魂の祈り・生のあかし

香 谷 トシエ（七十四才）

被爆地…安芸郡府中町茂蔭

当時の急性症状…なし

現 症…胸腰椎カリエス・体幹機能障害・気管支拡張症・動脈硬化症・白内障・骨粗鬆症

生　い　た　ち

広島県賀茂郡熊野跡村に六人兄弟の長女として、農家に生まれました。帯のように細長い村の中心を美しい川が流れ、この川に並んで県道が白く走っていた。狭い水田が川と道路の両側に僅かにあった。その山寄りに家々が点在して、山の中腹まで畑が耕されていた。深い山にかこまれた美しい自然の中の営みは、また非常に厳しいものであった。私はそのような環境の中で成長した。

父香谷郡三、母ワカヨ、祖父母、私達兄弟六人計十人の大世帯は生活が大変だった。貧しい生活のため、私は小学校卒業と同時に、家を離れて職業をもった。二十五才の時カリエスを発病した。それが私の生涯を一貫して支配した。

被爆時の状況

原爆中心地から約四・一キロ離れた安芸郡府中町で被爆した。当日はとても快晴で、これが戦争をしている国かとも疑いたくなるような朝だった。部屋を中心に坐って新聞を拡げていると、突然大きなゴウ音とともに強い閃光がひらめいて、その場にうつ伏せていた。気がついて見たら、仏壇は倒れ、壁は落ち、窓硝子は散乱し、棚からは物がみんな落ちて足の踏

み場もない状態になっていた。二階の廊下の手摺に乾してあった布団が、隣家の庭まで爆風に飛ばされていた。幸いに怪我はしていなかった。何がどうしたのかさっぱりわからなかった。近くに東洋工業があるので、又何時爆弾がおとされるかわからないというので、ひとまず府中の町へのがれた。

その日の夕方家に帰ってみたら、知人がひどく焼けただれて玄関の部屋に寝かされていた。ひどい痛みようで、顔が大きく腫れあがり、膿が流れてウジがわき、なすすべもなく三、四日で死んだ。

被爆後の生活

ひどく病弱であった私は、長い療養生活が続いた。貧しい中での療養は生と死の間を往来し、生きるとは何か、死とはと懊悩する日々が続く。再び起き上れないだろうという不安の中で、周囲を見つめる余裕もなく、ひたすら病身という殻の中から一步も出られない日が続いた。そうした時に、敗戦という大きな犠牲によってうちたてられたものだろう、私の今日あることに、言いしれぬ感謝と漸愧がある。子もない、夫もない私の晩年は、一人の生活にピリオドをうたなければ支えられない状態になったので、入所をお願いし、許し得られた。静かにベットに横たわる夕べ、謙虚に頭を下げて、鎮魂と平和のために祈りをささげた。

いと思う。

ホーム入所前後

戦争によって廃虚と化したこの街並も、立派なビル街として様相を一変した。人々の努力と英知をかたむけて物質文明が築き上げられた。そのかげに、何か精神の弱小が思われるこの頃である。又一方で、核の時代を迎えて何となく不穏な時代が近づきつつあるように思えてならない。「人が住める」というみだしで、カトリックの司教の方が新聞の小さな欄に書いておられた文章をのせておく。

「神は世界をいたずらに造らず人が住めるように造られた」。何故地球には空氣があり、水があり、緑の樹木があり、太陽が適当な光と熱を与えているのだろうか。宇宙飛行士が月に到達した時は、それは地上から眺めた美しい月の世界ではなく、灰色の世界であった。それに反して、宇宙から眺めた地球は、飛行士がエメラルドグリーンと呼んだように緑の宝石の世界であった。この違いは、前者は生物が住んでいない世界であり、後者は生物が住み人類が住んでいる世界だからである。太陽、水、空氣、緑がなかったら人間は一瞬も生きていくことはできない。だれが一体このような配慮をしたのだろうか。神がかたちどって創造した

大切な人類が住めるように、その英知と力を働かせたのである。この美しいエメラルドグリーンの地球を、地球上の個々人がしっかり守っていく義務があるだろう。

あの恐ろしい戦争が二度とあつてはならないし、してはならない。人類の平和のために、幸福のために、私には具体的には何も出来ない。短い人生を静かに祈りによって私の生のかしにしたいと思う。

ノーマア広島

藤 原 金 子（七十四才）

被爆地…広島駅と市電との中央。

当時の急性症状…火傷（頭、顔、首、背中）、高血圧。

家族の死亡…姉夫婦

現 症…高血圧・ケロイド・心臓病

広島市台屋町51番地で、父倉本栄吉、母ヨシの三女として生まれる。父は私が三才、母は私が三十八才の時に死去する。

被爆時の状況

広島駅と市電との中央において被爆。風船の様な円形30 cm位の物が、上ったり下がったりしていた。私がちよつと下を向いた瞬間、ヒューと言う悲鳴と一緒に3メートル飛ばされ、目がさめた時は、目の前が真黄に見えた。一瞬方向がわかりませんでした。通行人は沢山いましたが、皆、幽霊の様に見える、死体もあり、本当にこの世の地獄の様でした。その後、方々に火災がおこり、急いで栄橋の下に降り、六時間位泳いでいました。小石のような雨が降り、大きな石の陰に居りました。

姉の行方を探しに、川端ずたいに台屋町に行きましたところ、家は無くなり皆、東練兵場に行った様なので私も行きました。そこで姉と会いました。当時、私は陸軍病院に看護婦として勤務していましたので、私よりひどい火傷をした人の看護もしました。

被爆後の生活

台屋町の跡地に、天応の大山町の伯父の家に集まる様にと立札があり、火傷の痛みで歩行

困難であつたが、姉に手を引いてもらいながら、歩いて天応の伯父の家に着いた。火傷の手当にじゃがいもときゅうりをすり、三時間ごとに塗り替えた。たくさん膿が出るので、毒だみ草を二年間飲みました。

小屋浦に家が見つかり、そこに永住しました。私は和裁で、フミ姉は、子供相手の菓子を売って暮らしました。

ホームへはフミ姉が三年前より入所して居りましたので、様子もよく判りました。それで、私は自主的に入所させて頂きました。毎日が楽しく、職員の方々に暖かく見守って頂き、本当に有りがたい生活を送らせて頂いて居ります。

“ノーモア広島”である事を念じながら、筆をとめます。

青　い　光

赤　崎　フサ子（六十七才）

被爆地：広島市中広町

当時の急性症状：吐気（五日間）、下血（一か月）

家族の死亡：姉（三十才）、弟（二十五才）、弟（十三才）、母（六十五才）

現　　症：スモン病・腸潰瘍・糖尿病・心臓病

大阪市港区九条南通り三丁目で赤崎元藏、きくよの女三人男三人の二女として出生。大阪市立九条第三尋常小学校卒業後、昭和十四年母の郷里広島へ帰った。

被爆時の状況

当日は家に五人いて、母は買い出しに可部へ出かけ、姉は建物疎開に、すぐ下の弟は暑さが当り家で寝ていました。一番下の弟は学徒動員で土橋へ、私は爆心地から一・五キロの軍需工場にいました。

二階で作業をしていたら、東の方から青い光が射し、家が揺れて二階から落ち気を失いました。二、三分位して気がついたら、道路の真ん中に立っていました。薄暗く夕方のようにした。落ちた故でしょう、胸が苦しく、頭を怪我し、手も四厘位の切傷をし、治るのに一か月以上かかりました。あちらこちらから人が逃げるので、私もついて逃げ、中広町の畠へ出ると、そこに怪我をした人が沢山いました。

己斐の親類の家に行ったけど、何も食べられず、吐きそうになり、三日程寝ていました。

軍医が近くへ来ましたので薬を貰い、良くなりましたが、一か月位して下血し始め、兎玉医院で受診したが仲々良くならない。日赤病院に通院し、漸く一か月位して良くなりました。

三才年上の姉は、町内の勤労奉仕に出たまま遺体も見つかりません。すぐ下の弟は家にいましたが、相生橋の上の方の川岸にいたのを母が助け出し、己斐の親類に連れ帰り八月十五日に苦しんで死にました。一番下の弟も学徒動員のため土橋へ行き未だに遺体も見つかりません。

母と一緒に、もといいた本川町空鞘に帰り、バラックを近所の人に建て貰いました。行李三個程持つて帰り、売り食いでした。一年程して母が心臓病で倒れ、三か月位看病しました。母の病状が良い時には近所の手伝いに行きました。買出しが仕事の様でした。一年位は仕事もなく困りました。昭和三十四年、母は死にました。

ホーム入所の前後

入所迄は廿日市のアパートで一人暮らしてました。胃腸が弱く、夏になるとお腹をこわしてました。五十二年の夏にひどい腹痛を起こし、嫁さんに三日〜四日世話になりました。その時、弟嫁にホームを勧められ、皆に迷惑をかけては済まないと思い決心しましたが、入所する迄は心配で、夜も眠れない位でした。入所後、人間関係が難かしく、三か月位ノイローゼになりましたが今は慣れました。

再 会

森 本 シエノ（八十三才）

被爆地…広島市舟入川口町

現 症…動脈硬化・胃アトニー・虚血性心疾患・貧血・両側下肢神経痛・膝関節リウマチ

島根県邑智郡出羽村大字で、三女として出生。二十一才の時結婚。君江を出産するも、四年後、子供を置いて離婚する。三年後、森本と再婚する。

市内川口町の家で夫と共に被爆する。体に負傷はなかったが、家が全焼し、その日、己斐を通り廿日市町役場まで避難する。途中、近所の子供（三才ぐらい）が泣いていた。側で老婆さんが虫の息だったので、子供だけ連れて行く。三日間一緒にいたが役場に預け、山県郡千代田町の夫の妹宅へ行き、約一か月居住。豊平町吉木の夫の兄家に厄介になり、最後に兄

の近くに家を買って落着く。

豊平町で約三十年間農業をして暮らす。再婚先では子供はなく、夫の妹の子供正則を十六才の時養子にする。夫は四十六年死亡し、前夫は生存。実子君江とは交流している。

子供も良くしてくれ家に来る様に言ってくれたが、嫁に気兼ねで老令ではあるし、生活が不安のため、ホーム希望し入所。今はおかげ様で、良くしてもらい幸せです。ありがたいこととです。

五十三年七月、ホームに取材に来られた新聞記者に、被爆時助けた子供がどうしているか知りたいと言ったら、夕刊に記事が出て、それを読んだと東京から三十三年ぶりに一度お礼を言いたかったと逢いに来て下さいました。

職員全員が爆死

梶 下 力 男（七十三才）

被爆地：八月九日、基町へ入市

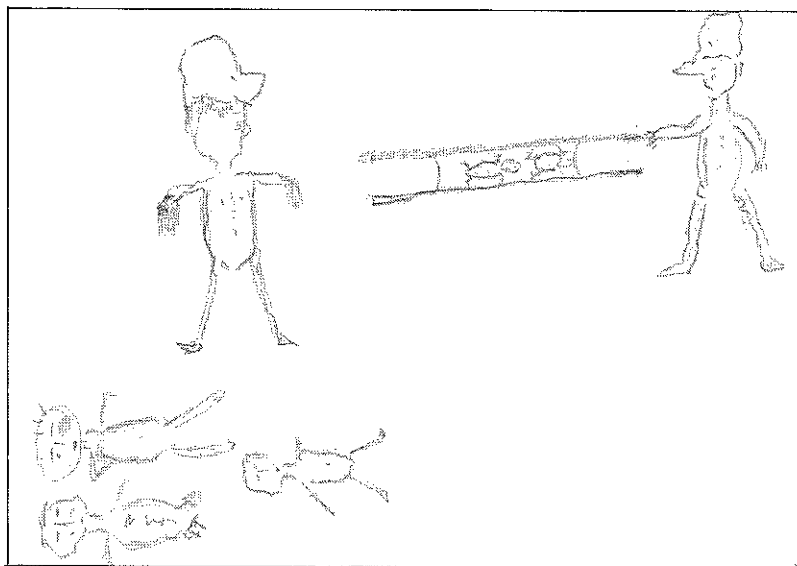
当時の急性症状：なし

家族の死亡：兄嫁（相生橋上にて）

現 症：慢性肝炎・糖尿病・手首関節の痛み

生 いた ち

明治四十四年三月六日、広島県安芸郡矢野町字大上にて生まる。大正二年、父の商売の爲鹿兒島市に行く。小学校四年生の時、商売の都合で宮崎市に移住し大淀小学校に転校する。昭和三年、宮崎県立中学校を卒業する。就職難の爲十一月迄無職で、十二月、広島市役所蓄産課の水野技手の世話で広島養鶏組合に就職し鶏卵販売の事務職となる。昭和九年六月、自家営業を志し、昭和十六年迄営業するも、戦争が拡大し営業が出来なくなり、広島陸軍軍需品支廠に勤務する。昭和二十年十月、残務整理も終わり退職する。



(画・梶下力男)

被爆時の状況

妻や子供は、妻の実家、安佐町日浦村字毛木に疎開していましたが無事でした。妻子の元に行っていたので直爆は受けなかったが、私は病気休養の為七月末より休暇を取っていた。八月九日に日浦町から自転車へ乗って帰ったが、横川に着いて市内を見ると白島の通信局だけ見え、木造建物は皆つぶれていた。実母が広島市比治山本町に居住していましたので、母を尋ねて方々探した結果、仁保町大河小学校へ避難していた。首や肩を火傷した程度で安心しました。勤務先の広島陸軍軍需品支廠の出張所が小姓町にありましたので、職員全員が爆死しました。死体の処理が十月迄かかりました。小姓町は爆心地に近かった

ので真黒に焼け、誰か全々解らなかつた。二十名ばかり死体の処理をした。

被爆後の生活

昭和二十年十月迄に広島陸軍軍需品支廠の残務整理が終わりましたので、妻の実家に御世話になりましたが、昭和二十二年十月から三十五年六月迄広島駅前郵便局に務めました。家事の都合に依り退職し、十月から五十一年六月迄広島東部青果株式会社に務めました。年令が六十五才になったので退職しました。

西区井口明神町に住む長男の家に同居していました。福岡県大野城市に住む次男秀伸宅へも世話になり、色々と気苦労しました。広報により当ホームを知り、長男と相談の上入所させて貰い、日々幸福に過ごしています。本当に有難いと思っています。

被爆

中村 ナツヨ (七十六才)

被爆地：市内江波南町一〇八五

現 症：気管支炎・冠不全・動脈硬化症・脳血栓後遺症・神経痛

山口県玖珂郡来根村南桑にて父井村初吉、母キチ。姉三人、兄一人、母ちがいの妹一人。母は私が二才になる二ヶ月前に死亡。生まれた所は錦帯橋より七里奥で四方が高い山で、米が取れず、姉二人で米を作りながら貧乏で苦勞しました。三番目の姉は母と前後して死にました。

江波南町の配給所の主人が兵隊に出られたので、私の主人はその後を受け、配給物を市に取りに行く途中、御舟橋附近の電車で爆風に飛ばされ、腹、両腕、顔を三分の一残してやけどを受け帰って来ました。長男も江波小学校で頭等負傷する。私は自宅で被爆するが負傷なく、当時医者はおらず、二人の看病に大変で、自分のきずにバイキンが入り腕の痛みに苦しみました。

原爆で家は壊れ、金はなく、主人も三十七年に亡くなり、代用食ばかりで苦勞しました。二人の子供を連れ、日雇いに出て、基町の母子寮に三年半入らして暮らしていました。

四十三年まで五男と一緒に住んでいたが、就職してからは一人で暮らしていたので不安を感じ、民生委員、子供と相談し入所を決意する。今は何の心配もなく、おかげさまで安心して暮らさせてもらっています。

被爆者援護法を

佐々木 一人（九十一才）

被爆地……広島駅

当時の急性症状……胸部に火傷

家族の死亡……甥、姪

現 症……貧血・慢性肺炎・耐糖異常・心筋硬塞・胸部異常陰影

生 いた ち

安佐北区白木町で、父佐々木直吉、母きせの間の三人兄弟の長男として生まれました。十才の時海軍へ志願し、第一次大戦に参加し、負傷のため兵役免除となりました。

その後二十二才で警察官となり、八年後、父死亡のため退職し農業を継ぎました。三十才で妻よしのと結婚し、三男に恵まれました。

被爆時の状況

志和口で一人暮らしをしていた母が病気になったため、妻が子供達を連れて看病に行っておりしました。私は再び警察官となって、京橋の派出所勤務をしておりました。八月五日は一番だったので、志和口の母や家族の所に行きました。

六日朝は、出勤のため汽車で広島駅へ着いた時被爆しました。胸に火傷をしましたが、その時は夢中で、どこをどのように歩いたのか思い出せませんが、草津の弟宅へ行きました。

胸の火傷は二日後に水ぶくれになりました。幸い、その後も身体に異常はありませんでした。弟の長男が、学徒で建物疎開作業に従事しており行方不明だったので、四日間市内を探し廻りました。似島で見つかりましたが、全身火ぶくれになっており、苦しんで七日目に死にました。姪も動員先で死にましたが、遺体は腕時計でかろうじて確認出来たような状態でした。

翌七日に、妻は私の身を案じ草津の弟宅へ探しに来ました。私の無事な姿を見て大変喜びました。私はその後暫くの間、弟宅より通勤し悲惨な生地獄のような被災地で、死体の処理や怪我人の運搬など一生懸命致しました。妻は田舎から一斗ずつ米を背負って来てくれました。

被爆後の生活

被爆二、三年後、白木町へ帰り農業を続けながら、二十一年余り町内のお世話をさせていただきました。次々と三人の息子も一人前になって家を離れたので、妻と二人の生活になりました。

ところが五十四年に妻が七十七才で病気になり、寝たきりの生活になりました。二年間私が看病しつづけましたが、だんだん妻は私が誰なのかさえわからなくなりました。私も高令で世話が出来なくなったので、妻を安佐病院へ入院させました。その後二年位独り暮らしをしておりましたが、援護課の方が、独り暮らしはよくないのでホーム入所をすすめて下さいました。

五十七年六月二十二日に入所致しましたが、入って本当に良かったと思ひ喜んでおります。月に一度は、入院中の妻の顔を見に行くことが楽しみになっています。

私達被爆者は、原爆の恐ろしさ、平和の大切なことを、世界中の人々や、日本の次の世代に知らす責任と義務があると思います。私は慰問に来られる小・中・高校の生徒さん方に一生懸命に戦争の悲惨なことで、平和の有難さを話しています。生徒さん方は涙を浮かべて聞いて下さいます。老先きの短い私達は、被爆者援護法の制定を待ち望んでおります。

一枚のズボン

佐　西　マ　ツ（六十七才）

被爆地：鉄砲町（〇・八km）

当時の急性症状：頭髮が抜け両手と首に火傷。手足に水泡が出来た

家族の死亡：なし

現　　症：神経因性膀胱・慢性膀胱炎

生　　い　　た　　ち

京都府舞鶴市魚屋町にて、父佐西吉太郎、母ふゆとの間の一男一女の長女として出生。昭和八年ハルピンに渡り、十七才の時広島県人と結婚し、百貨店をしておりましたが、実子に恵まれず十八年に離婚しました。十九年十二月広島に帰ったが、戦争が激しくなったためハルピンに行かなくなり、市役所の紹介で陸軍中将宅のお手伝いとなりました。

被爆時の状況

陸軍中將宅の防空壕の中で被爆しました。大きな音に驚き外に出たが、真暗で方角もわからない程でした。暫くして明るくなつて見れば、着ていた薄い着物も着ておらず、裸になっておりました。裸で知人を尋ね歩き、夜になると川岸に集つておられる方々の側で野宿をし、夜が明けたら、又知人を探して歩きましたが誰一人と知人には会えず、一銭のお金もなく、着る物もないまゝ、広島市内を歩き続けました。

一週間も過ぎた頃でしょうか。ひょっこり知人に会い、通信局に連れて行ってもらい、そこで治療を受けました。女が着る物がないと困るだろうと、軍隊のズボンを一枚頂き身に付けることが出来、本当に嬉しく今も忘れることが出来ません。

中將さんは丁度出張中で免れられて良かったのですが、後でアメリカ兵に東京巢鴨に連れて行かれました。幸いにして主計中將であつたので戦犯を逃れられました。

一足毎に死体があり、生きている人も火傷で醜いことでした。今思い出しますと、生地獄とはこの事だと思えます。

被爆後の生活

お手伝いや観音町で食堂を始めるなどして、ようやく今日まで生きてきました。その間大病をし、入退院を繰り返しました。一人者ゆえ、年を取れば働く所もなく、年金だけでは心細くなり、ホームでお世話になることに決め、昭和五十九年十月、入所させていただきました。本当に良かったと感謝しております。

原爆の夫を看病して

前田 えつの（八十七才）

被爆地…広島市翠町一七九二―二番地（自宅）

当時の急性症状…自宅の玄関前に立った時、爆風のため転び顔、首、手足から出血して、応急手当てをした。外傷は短期間で治癒したが、その後白内障が急激に進み、転ぶことが多くなった。

家族の死亡…主人新治郎は、被爆して全身火傷のため、二、三年間看病、一時は全快した

様であつたが、白血病と脳血管障害等のため昭和四十四年五月二十日に永眠した。

現 症：白内障・糖尿病・脳動脈硬化症・腎不全浮腫・高血圧症・自律神経失調症・陳

旧性肺結核

生 いた ち

私は安芸郡中山村、父久保田初次郎、母タマとの間に、男四人、女三人の三女として出生。大正五年四月に渡米、ロサンゼルス在住の前田新治郎と結婚した。長男米雄（大正六年生）、次男敏雄（大正九年生）の二子を出産した。

大正十一年にロサンゼルスの家を売って帰国し、南竹屋町に新宅を購入して住居とした。長女房江（大正十二年生）、次女誠子（昭和五年生）を出産した。昭和六年、現在の翠町に新築して転居した。長男は、広島県立二中卒、県師範卒後、県海外協会から選抜されて渡米し、ロサンゼルスの二世教育のため、日本学校の教師となった。昭和十一年九月ロサンゼルスの大学に入学し、卒業して入隊したのである。昭和二十年終戦となり、シカゴで除隊して、クリーニング業に勤務した。

私は、幼少の頃から、日本は神国であると感じていました。明治時代から、日清戦争、日露戦争、支那事変、日独戦争と次々の勝ち戦が続きました。しかし、その間多くの犠牲者

が出まして莫大な消費をしました。何にも分からぬ私等迄も悲しい思いがしました。この度は世間話で、あちこちで米国と戦争になるとのこと、米国大陸と小さな日本とでは、問題にならないと思っていました。が、国家総動員ですから、竹やり、水かけ、食品輸送の勤労奉仕にと忙がしい毎日でした。学生等も勤労奉仕で工場へお手伝いに行くので勉強にはなりません。食料も不足なので、道路の端までも耕作して野菜を作り、配給では色々な草や豆粕やら肥料にする物まで食べました。

「戦争に行っている人には食料を送らねば戦争は出来ぬ」と一生懸命です。戦争前には米国にいる長男から衣類やら食料品、日用品にいたる迄、色々な物を送って呉れましたが、戦争勃発となってからは音信不通となり、毎日心配ばかりして、お宮やお寺へ祈願参りの日々でした。

丁度米国では、長男が大学卒業前に戦争勃発となり、春まで待つて卒業証書を貰い、米国兵に取られ、フィリッピン送りとなりました。日本の両親と戦う様な気持ちがするからと上官に進言しましたが、聞いてはくれませんでした。苦しい米国兵の期間も、終戦時シカゴで除隊になる迄続きました。この話は終戦後文通が出来るようになってから聞いた話です。

原 爆 投 下

昭和二十年八月六日当日は、私達の組が当番でした。道路の立退きの家の後片付け作業なので、「朝涼しい間に行きましょう」と、四時からお隣りの奥さんと次女の三人で、朝食もしないで隣組の車と乳母車を持って行きました。廃材を積めるだけ一杯積んで、帰りかけ、広島高等学校のあたり迄帰った頃警戒警報の発令が出たので急いで帰りかけた。途中で解除となり、やれやれと思つて自宅の前に立った。娘に「裏から廻つて戸を開けて頂戴」と言つた時「ピカッ」と光つた。西の方を見ると高い空から火の玉が落ちるのが見えた。「誠子ちゃん」と次女の名を呼んで家にはいろいろと、戸を開け暗幕をくぐろうとした時「どん」の音と共に転んだ。立ち上がろうとしたら、顔、首、手足から血が流れているので、救急袋から脱脂綿を出して血を拭き取るばかり。鏡は硝子が壊れ見ることが出来ませんでした。娘の誠子は、硝子が膝の下に立ち込んでいたので悲鳴をあげていました。自分の傷も忘れ、娘を県病院に連れて行こうと家を出たら、近所の屋根の瓦が飛んでいた。自分の家に投下されたのだと思つていたのに、よその家の柱が折れて転がりかかっている。屋根が吹き飛んでいるもの。植木は上が飛ばされ根元の幹が残っている。電柱が折れて電線が綱のようにぶら下がり、道路は歩くのに、こわごわです。

病院に行つて見れば、中へはいれず、内庭で看護婦さんも傷だらけで、あちからもこちからも「死にかかつてゐる来て呉れ」と引張りだこである。机の上には、繃帯、ガーゼ、脱脂綿が出てあり、自分勝手に巻いて帰るしかなかった。

原爆投下時は、朝食時だったので火の始末をせずに跳び出したので、燃え移り、大火になり、誰一人消火に行く者も無く、広がるばかりである。まっ赤な火傷のおぼけの人が逃れるのに精一杯である。

主人新治郎は、舟入川口町の戸田工業に出勤中で、屋外に居たので全身（顔から足まで）火傷して竹杖にすがりながら帰つて来た。顔は青ぶくれ、目は細く、首に足に繃帯を巻き、まともに見られない悲惨な姿であつた。第一の言葉は「皆んな元氣であつたか」と有難い言葉であつた。後、ああ命があつて良かったと嬉し涙がとまらなかつた。翌七日宇品の軍の倉庫前にテントが張られ、負傷者が収容された。主人も連れて行き私が看護した。原爆での火傷は普通の火傷と違って、臭くて、しんから痛む。馬鈴薯の汁とか、胡瓜の汁が良いと言うけれど、看護兵が時々見舞つて呉れても手当の方法がわからないから、なかなか治癒しない。表面の皮膚が良くなったかと思えば、指で押すと下から膿が出る。何時良くなるか全くわからない。同室の人の中には肉がさけて骨が見える人、蠅が来ても追うこともできず、痛くて唸る人、次から次と死んでゆく人、今度は自分の番では無いかと生きた心地は致しませんで

した。

八月十五日に天皇陛下が戦争の終わったお言葉があるとのこと、何んと言ってお慰め申し上げてよいか、おいたわしい限りです。ついに戦争は負けました。物資の多い大陸の米国と、小さな日本では、大和魂があつてもかありません。今後は二度とこんな犠牲者の出ない、平和な日本に成るよう努力して欲しいと思います。

被爆後の生活

主人の火傷の看病も数年間続きましたが、次第に回復しましたので、戸坂の山をぼつぼつ開墾して甘薯や麦を作れるように毎日通いました。小さな小屋を建て、道具の置き場所まで造りました。二男敏雄に嫁をとり、長女房江を嫁に出しましたが、主人は原爆症の再発で白血病、脳血管障害のため看病の方法も無くて昭和四十四年に永眠いたしました。

その後は主人を亡くしたのと、看病の疲れが出たのか、急激に白内障も進行して、眼がうすくなりました。或る朝お掃除と風呂焚きをしていました。スリッパを履いていたので足が滑べり、縁で胸を打ち、助骨を一本と手首も折り、翠町の池田病院に入院し、一週間後呉市の青木外科医に移りました。なにしろ長男米雄が米国に居るので連絡も思うようにならず、長女房江、次女の誠子も結婚して米国にいます。帰国することも殆んどありません。次男の

敏雄と弟の久保田俊視が広島にいますが、何れも勤めが忙がしく時々来て呉れる程度です。

ホームに入所

昭和五十一年五月二十五日に青木外科医を退院して、同時に原爆養護ホームに入所させて頂きました。傷は完全に治癒していますが、白内障で眼がよく見えません。養護ホームに入所させて頂いて施設の完備しているのに驚きました。趣味を充分に生かして、手芸に夢中になっています。所長さん、課長さん、主任さん、寮母さん、先輩の皆さんが親切に指導して下さいるので、楽しい愉快な日暮らしをさせて頂いています。退屈にならないようにとクラブも色々あります。書道、茶道、生花、造花、張り絵、音楽、舞踊、俳句等です。月二回の仏教法話も別院から来られて聞けます。美容奉仕も月一回来られます。お風呂も週三回、洗濯も温水が出て洗濯機も備え付けがあり、自由に出来ます。春秋二回の一泊旅行もあり、一年中のお祭り行事もあります。とても楽しい極楽です。ほんとうに有難うございます。皆さんにお礼を申し上げます。

昭和六十年が原爆四十周年に当たり、私の体験記の一端を述べて、現在核戦争が起こるかも知れない状態、世界破滅を防ぐことが出来れば幸せであります。「ノー・モア・ヒロシマズ」世界平和を祈って終わります。

やりきれない淋しさ

熊 崎 満 枝（七十七才）

被爆地：広島市己斐町 爆心地より三km

当時の急性症状：嘔気

家族の死亡：義姉、義妹、義姪

現 症：白内症・慢性緑内障・貧血症・膝関節症

満洲旅順で出生、奉天にて結婚し昭和五年帰国する。

被爆時の状況

B 29の飛行機が上空を通り抜けたら空襲警報解除になり、安心して身につけていた貴重品を棚に置きました。遠くの方で火の元に気をつける様にと聞こえました。（己斐が火事にならなかったのはこの一声で皆様が気をつけたからと思います）。

何分たちましたか、シューピカッと薄橙々色の光線が目に入ったかと思う直後、家の二メートル前の八幡川に大きな爆弾が落ちたと思つて大声で早く避難する様叫び続けました。

突然の事で、貴重品を身につける間もなく皆の後について逃げました。表玄関から逃げた方が早いのに慌てて素通りし、一廻りして裏玄関から逃げました。最後に私が姿見の前を通り過ぎた途端、鏡がパッと破裂しました。

その時、爆風がドンと来て家が壊れたと思います。後で鏡が木っ端微塵になっているのを見て、体に刺さっていたらと思ひ身震いしました。屋根も瓦もずり落ちて、二階も一階も木や土が散乱し、目も当てられない様になりました。何処から手をつけてよいか茫然とするばかりです。周りが立木で窓は板が張っており、家の奥の方にいたので、皆火傷しないですんだと思います。

主人は堺町の店薬局に行くのに洗面所で支度をしていて、大きな柱が倒れ、腰を強く打撲しました。負傷者が多く診て貰えず、家で赤チンキをつけ湿布しました。市女の長女は学徒動員でいつも出るのですが、機械休みで友人と宮島に行く為己斐駅まで行き、忘れ物を取りに帰宅し、玄関でピカッと来ました。

附小の長男は、己斐の生徒は学校に行く日で、友達がいないので家の中で遊んでいました。黒い雨が降り、近くの八幡橋の下に避難しました。全市火の海にするとデマが飛び、表通

りより離れているので様子が分からず恐怖心で一ぱいでした。

高校の義甥が学校から逃げて来ました。己斐の山手の農家の人が桃を持って来られたので、食事代わりに買って食べた、川の石垣の鰻が飛び出して死んでいるのを焼いて食べたりました。後で放射能の事を知り今でも不安です。

午后になって、次々と堺町方面から知人が逃げて来られ、市内の様子が大変な事をはっきり知りました。髪はバサバサ、顔面蒼白、灰色で裸足で放心状態で、玄関に着くなり安心してか皆さん倒れかかって来られました。

傷は見えないけど、打撲が酷かったと思います。ガスを多く吸っている、苦しんで苦しんで本当に可哀相でした。

軍から薬や注射を貰い一生懸命介抱しましたが、次々と亡くなれました。

家の中は怪我人で足の踏み場もなく、風邪を引くといけないので着物や布団を勝手に出して着て貰いました。夏でも夜は冷えましたから。

義姪が夕方疲れ果て、見るも可哀相な姿で訪れました。目立った傷はありませんでしたが、序々に吐き気がし、黒い血の斑点が顔や体に出き、黒い血便をし、悪感が来て止まらず、髪は抜け始め、苦しんで三日程で亡くなりました。鏡を見せてとせがまれたのは本当に辛かったです。

消防の知人が、義妹を担架で夜連れて来て下さいました。頭中央をお腕の大きさぐらい丸くポカッと深くえぐり取られ、少しの皮膚で繋がって、血も出ていませんでした。小さいローソクの光で、木綿の糸と針をアルコールで消毒して縫合しましたが、可哀相に苦しんで、その夜亡くなりました。

食事は配給を頼んで余分に貰い、酔っぱくらっているのをよく洗って皆と食べました。

外は真暗闇でさっぱり分からない。八丁堀中心街と市内全体が真暗で、あちこちに火が見えましたが、近くで見たらさぞ大火事なのだろうと思いました。

義妹の死と、人の苦しむうめき声、小さなローソクの光、本当にやりきれない淋しさでした。

私は疲れ果て、仰向けに体を休めると空がまる見えです。今飛行機が来たら、雨が降ったら、怪我人をどうしようかと目の前の事が心配になりました。怪我人を抱えてはいましたが井戸が壊れず、水が飲めて大助かりでした。水の有難さが身に泌みました。近所の人達にも使って頂きました。

二日程して、堺町に主人と義甥が義姉を探しに行き、玄関で焼け死んでいるのを見つけました。

被爆後の生活

義甥三人戦地より帰って来る。高校生一人、子供三人、夫婦と九人家族で、疎開してあった薬や衣類等売り乍ら生活して頑張つて道を開きました。

主人死亡後長男と同居していましたが、知人から原爆ホームを教えて頂き入所しました。いろいろと趣味もあり、あれこれと作り、孫や子供、知人に差し上げて喜んで頂いています。老後を精一杯楽しく過ごさせて頂き有難く思っています。